



Shiogama city Miyagi Pref.

2015 Annual Report

Aoyama Gakuin University Volunteer Station

2015年 年次報告書

青山学院大学ボランティア・ステーション

青山学院大学ボランティア・ステーション 2015 年次報告書

目次

ボランティア・ステーション概要	2
組織体制	3
顧問挨拶	4
担当職員挨拶	5
学生代表挨拶	7
活動場所一覧	8
ボランティア活動実施までの流れ	9
卒業式・入学式 写真撮影ボランティア	10
渋谷区清掃活動	11
えびす青年教室・GAYA	13
新スタッフ合宿	15
ボランティアフォーラム	17
塩竈プロジェクト	20
保育	21
学童保育	23
サマースクール	25
けやき教室	27
防災ディスカッション	29
農業支援	31
漁業支援	33
花火大会・ライブ	35
PR 動画	37
陸前高田プロジェクト	39
スタディツアー	41
教育支援	43
地域支援	45
福祉支援・思い出の品	47
福祉支援・あすなろホーム	49
インドネシアプロジェクト	51
フィリピンプロジェクト	55
ネパールプロジェクト	59
ネパール救援募金	60
青山学院大学同窓祭	63
Meal for Refugees	65
青山祭	67
卒業学年報告	69
スタッフ一覧	74
編集後記	75

ボランティア・ステーション概要

設 立：2011年5月

スタッフ：学生75名、教職員（3名*）

*教職員については実務担当者のみ

所 管：緊急支援対策委員会（事務担当：政策・企画部）

～モットー～

Encounter-出会い-

～ミッション～

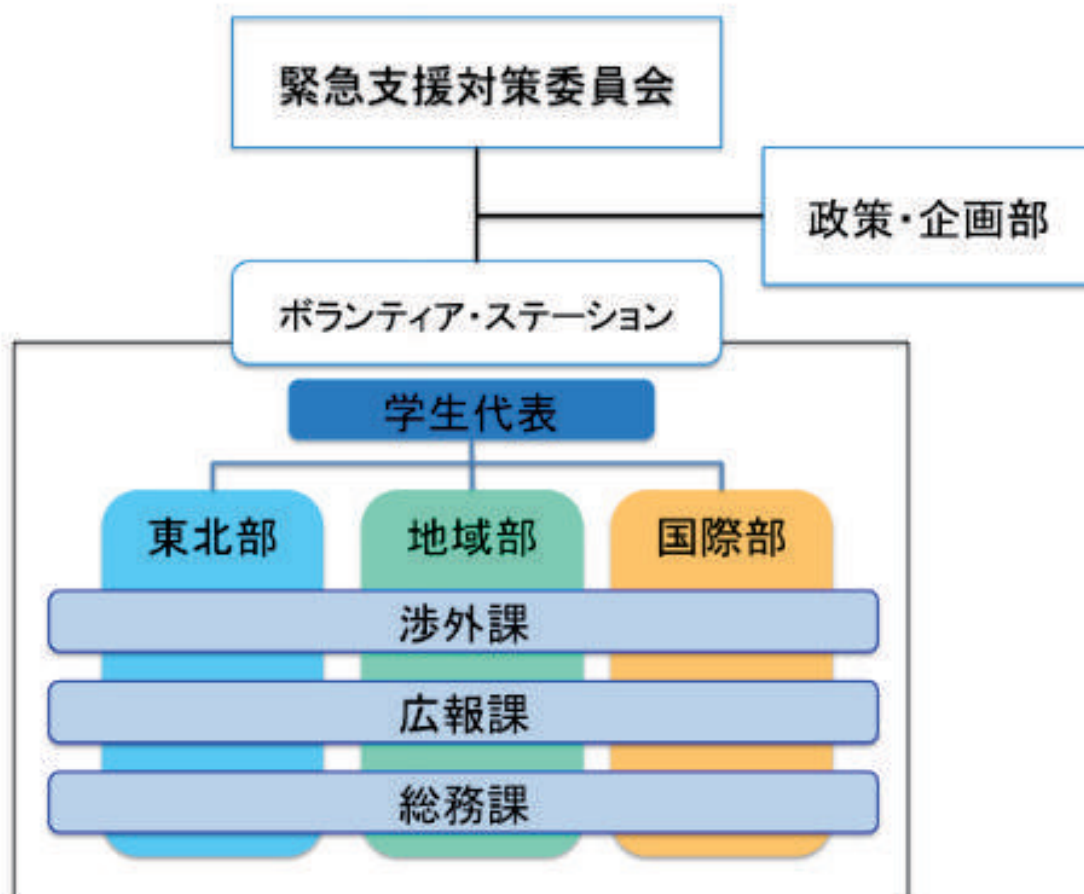
社会に貢献したいという想いを持つ学生に対し、
社会のニーズに合ったボランティアを提供し、
私たちが「地の塩、世の光」となり
助け合って生きる世界を目指します。

～目標～

- 1、3SMILES（青学を、日本を、世界を笑顔に）を心がけ、行動します。
- 2、将来起こりうる災害や問題を想定し、ボランティアコーディネートできる人材を育成します。
- 3、社会で起きている問題に対して主体的に向き合い、行動できる人材を育成します。
- 4、社会において、人と人・地域と地域・意思と意志をつなぐ架け橋となり、多くの希望を生み出していきます。



組織体制



渉外課

- ・学内行事(学園祭等)への参加企画
- ・各種助成金に関する情報収集および申請

広報課

- ・SNS等による、広報活動
- ・学内広報に関するデータの作成および管理
- ・年次報告書の作成および管理
- ・ホームページの製作、管理

総務課

- ・学生スタッフの名簿および名刺の作成
- ・学内における、教室および機材の借用手続き
- ・ボランティア参加者との連絡、およびボランティア参加者の名簿作成

顧問挨拶

地球社会共生学部長
平澤 典男

2015年の青山学院大学ボランティア・ステーションの活動もいよいよ記録に残すときを迎えている。この1年、多くの学生が塩竈市、陸前高田市、フィリピン、インドネシア、ネパールにとび、また地元渋谷区で、それぞれ復興支援、小中学生の学習支援、文化交流、障害者支援、地域清掃とさまざまな活動に汗をかき、知恵を出し、支えを必要としている人たちの期待に応え、心を通わせる活動にとりくんでくれた。こうしてボラステの活動を振り返るときは、顧問として彼らの活動に寄り添ってきた者として感謝とともに誇らしい気持ちに浸れる瞬間である。

東日本大震災から4年と9カ月。これはそのままボラステの活動の年月と重なる。この間、ヒトが変わり、ニーズが変わり、活動内容が変わり、活動の組織が変わり、活動の範囲が変わっていった。これらの変化は、「とりあえず動こう」という時期から、「ボランティアをどう捉えるか」を考えながら行動する時期へと移行してきたことによるように思える。そして、この移行はボランティアが定着してきたからこそ、さらに持続可能なものであるようにするために「ボランティア学」への接近に向かうステージにきたということに他ならない。「学」ならば定義が求められる。自発性、無償性、公益性、などボランティアをとらえる視座はいくつかあるが、市場経済では満たされないもの、政府組織では提供できないもの、そこにボランティアの発現の場があると思う。震災時には自助でも公助でもない共助が叫ばれ、「絆」が強調されたゆえんである。

ところで、最近、「ボランティアは恋愛に似ている」とのコラムのコピーを入手したが、そこではボランティアには相手がいること、その出会いは偶然であること、苦しいこともあるが元気の源ともなるなどが挙げられている。見知らぬ相手との間に“ボランティア”という行為を通して新たな関係性を創出することがボランティアの特徴として追加されている。いわば「共生性」である。恋愛ならば1対1だが、ボランティアは自由意思で集まったものたちが組織として活動するのが一般的な形態である。もちろん、一人で行うボランティア活動(それは活動というよりも行動、あるいは行為と呼ぶのがふさわしい。)もあるだろうが、ここでは組織で行うボランティア活動、すなわち「組織ボランティア」について考えてみよう。組織ならば目的・目標があり、それを実行・実現する手段・手法を持つ。そして組織である以上、これを効率的にマネジメントするにはPDCAが構築されることが基本である。ボラステが「地の塩、世の光」を目標とし、東北部、国際部、地域部の組織を持ち、年間計画を立て(P)、実行し(D)、振り返り・気づきの場を持ち(C)、次の年度にその成果と反省を委ねる(A)。これらがフロントであるならば、教職員はバックオフィスとして安全な活動環境、正確な情報提供、活動資金の工面、他組織との連携、などの下部インフラを整えることが求められる。この1,2年、若い職員の熱心な指導によってボラステの組織としての完成度が一段と高まったことを実感している。また、仙波学長の学長基本方針に謳われていたボラステのボランティアセンター化への模索も加速化され、サービス・ラーニングとの接続等が論じ始められている。ボラステの発足時からこの活動にかかわってきたひとりとして、この4年と9カ月で、様々な活動の歴史を重ねて、いよいよ洗練された形態に進化してきたとつくづく感じる次第である。

ヒトはあらゆる生物のなかでも利他的な行動をとる能力を高めた存在であるといわれる。猛獣のように強くもなく、鷲のように空を飛べるわけでもなく、水中で自由に活動できるわけでもない。そのような存在が何万年もの時を生き抜いて生物進化の頂点に位置しているのは助け合う能力、協力する能力を身に着けたからである。他者が困っているときに力を貸す行為はヒトにのみ観察される。ボランティアは極めて人間らしい行為なのである。また、同時に「人と社会とに奉仕する」青学らしい行為なのである。ボラステの諸君はまさに青学の理念を体現したメンバーとして胸をはって、新体制のもとでその活動をつなげていてもらいたいと切に願う。

担当職員挨拶

政策・企画部
中尾 匠吾

政策・企画部にて大学職員としてボランティア・ステーション（以下、ボラステ）の担当をしている中尾と申します。活動内容詳細については、本報告書内に詳しく記載がありますので今回は大学組織としてのボラステの説明及び短いながらも職員として携わって感じていることについて書きたいと思います。

ボラステは、学内的には「大規模災害等の被災地に対する緊急支援に関する内規」のもとに置かれた組織であり、「ボランティア・ステーション運営要綱」においてその運用が定められています。学生スタッフが活動の主体となりつつ、大学（いわゆる緊急支援対策委員会）の意思決定のもと、ボランティアが必要な地域・人々へ支援を行っていくことが前提としてあります。

学生スタッフの活動の目指すところとしては、組織立ち上げ時より目標として掲げている通り、自らボランティア・コーディネートできる人材となり、より多くの学生へボランティア活動の機会を提供することを目指しています。ボランティア活動をコーディネートするとは、ボランティアを必要としている人・ボランティア活動してみたいと考える人それぞれのニーズを汲み取り、両者を結びつけることです。コーディネートという言葉には、「調整して全体の調和を生み出す」「各々の要素を対等にする」という意味があります。

このように説明すると一見簡単なようですが、実際に携わっていくとその複雑さを実感します。例えば、一口にボランティアを必要としている人と言っても対象が個人やNPO団体であったり、そこに地域のボランティアセンターや行政、企業等が介在している場合もあります。それぞれの性質も様々で、行政ならば公平・平等の原理、NPO団体ならば活動への共感原理が優先して働きます。

また、対象への対応は緊急を要するのか、特別な配慮を要するのかなど置かれた状況も異なります。一方では、ボランティア活動に興味を持っている人がボランティアに持つイメージや関心の度合いも様々です。

さらに、大学として意思決定や予算措置を行うため、内部では現場とは異なる視点から企画しようとするボランティア活動の意義を共有していく必要があります。

このように、複雑なステークホルダーとの関係性を、その言葉の意味通り各々を対等な立場として尊重しつつ、調整を行い、双方にとって意義ある企画を学生自身が作っていきます。意識する・しないに関わらず、学生という立場でこのようなことを実践することは非常に大変な作業だと思います。

しかしながら、この経験を通じて一つの企画を成功させたという経験は、きっとその学生にとって大きな財産となるであろうことも実感しています。職員という立場上、口やかましくせざるを得ないときもありますが、学生生活を振り返ったときに“頑張ってたよかった”と思ってもらえるように、私も後方から“ボランティア・コーディネートのコーディネーター”をできる職員を目指して努力していきたいと考えています。

今後ともボラステ学生スタッフならびに教職員共々、よろしくご指導くださいますようお願い申し上げます。

担当職員挨拶

政策・企画部
齋藤 敏幸

政策・企画部でボランティア・ステーションの担当をしております齋藤と申します。

2015年の4月からボランティア・ステーション（以下、ボラステ）の担当になりました。それまでは、直接ボラステの学生たち及びその活動に関わったことはありませんでした。担当になって以降、彼らが活動に取り組む姿勢を見ていると、自分自身が社会貢献活動を行ったことがないこともあり、いつも学生たちの意識の高さと、意欲の強さに感心させられます。

ボラステは、学内の緊急支援対策委員会という組織のもとに置かれ、東日本大震災以降、東北の復興支援・経済支援を行う「東北部」、海外での学習支援等を行う「国際部」、地元渋谷を中心に活動する「地域部」と、活動内容別に3つの部から構成されている組織であります。

ボラステの学生には、ボランティア活動そのものを中心に行うメンバーと、ボランティアの活動を企画し、一般の参加学生を募集して引率するなど、コーディネーター的な役割を行っているメンバーがおります。現状、ボラステは大学が所管する学生団体で、他の学生団体やクラブ・サークルなどと区別される存在になっており、アイデンティティを確立しつつあります。しかし、その運営体制やリスク管理の面など、組織の在り方自体は、本学の「大規模災害等の被災地に対する緊急支援等に関する内規」に定められた状況からは、離れてしまっております。

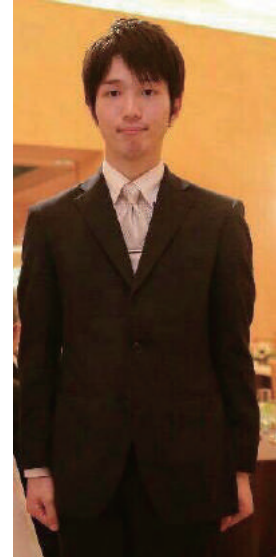
これからは、大学が所管するボランティア活動の組織、団体としてどのような在り方が社会から求められ、どのような在り方を自ら求めなければならないのかを意識の中におきつつ、ボラステを始めとして、ボランティア活動をしたいと思っている学生や団体なら、誰でもボランティア活動を始められるような、そんな学生の初動をサポートするために豊富な情報を持ち、多様なニーズに応えられる支援組織を構築することが必要かと思われまます。

ここまで学生主体で作上げてきた、ボラステの活動の良い面を損なうことなく継承しながら、本学のボランティア活動がさらに広がりを見せ、多くの学生さんが取り組める環境づくりを実践していけたらと考えております。

私たちボランティアの支援担当は、学生が社会（ボランティアを受け入れる側）と対等な立場で結び付けられたかたちで、社会貢献活動を行えるよう、また、活動を通じて彼らが、学内では得ることのできない、体験を通じた学びの成果を得られるような環境を整えていくために、さまざまな声に耳を傾けつつ、学生と教職員一体となって取り組んでいけたらと思っております。

今後とも、ボラステの活動に対しまして、ご理解とご指導を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

学生代表挨拶



2015年度 学生代表
教育学科3年
駒木根 怜

お陰様で、弊団体設立から早くも5年の月日を数えようとしています。

5年の月日…これは、東日本大震災を受け、2011年に設立した弊団体のスタッフ一人ひとりが、被災地のみならず発展途上国や福祉や教育の現場の社会問題に主体的に向き合い、行動を起こして5年の月日経つということの意味します。

これ以後も、弊団体が掲げる「青学、日本、世界を笑顔に！」を目標に、社会貢献活動を展開していく次第ではございますが、自戒を込めて一つ、付言します。

初代から脈々と受け継いできた伝統ですが、弊団体は、弱い立場の人にパートナーリズムをもって手を差し伸べる団体ではありません。言い換えると学生が主体となって、あらゆる立場の人と同じ目線に立って、ともに良い方へと共に歩みを進める団体です。まさしく青山学院大学が掲げる“サーバントリーダー”の体現と言えるでしょう。そうあり続けるためにも、日々の学びを止めることなく、精進してまいります。

最後になりましたが、今日も平安無事に活動ができるのも多くの支えなしにはなしえませんでした。日頃よりご理解とご協力いただいている多くの方々への感謝と敬意とを示すとともに、引き続きのご支援ご厚情を賜りますよう宜しくお願い申し上げます。

活動場所一覧



岩手県陸前高田市

宮城県塩竈市

東京都渋谷区

幡ヶ谷社会教育館(GAYA)、
恵比須社会教育館(えび寿青年教室)、
渋谷区清掃

ネパール
カトマンズ

インドネシア
ジャワ島
イモギリ群

※地図は『googleマップ』
(<https://www.google.co.jp/maps>)を基に引用・作成しております。



フィリピン
シキホール島

ボランティア活動実施までの流れ



①企画

ボランティア活動が必要な地域のニーズを調査し、ニーズに応じた活動を企画する。



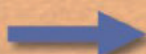
②視察

活動予定地域にて視察を行い、企画した活動の実施のために現地の人々と話し合いを行う。



③企画書提出

企画書を作成し大学側に提出。



④参加者募集

実施するボランティア活動について広報し、一般学生から参加者を募集する。



⑤ボランティア活動実施！



ボランティア活動実施後も、参加者を交え災害や防災について話し合う機会を設けている。

卒業式・入学式写真撮影ボランティア

【活動場所】

青山学院大学青山キャンパス正門前

【活動期間】

卒業式:3月25日 入学式:4月1日

【参加人数】約30名



(正門前にて撮影を行うスタッフ)

【活動背景・目的】

記念撮影のスポットである大学正門前には毎年多くの卒業生、新入生、またその保護者で長い列ができてしまう。そのため、私達が写真撮影を代行し、少しでも多くの方に撮影をしていただくことを目的とした。また、撮影場所は公道に面しており一般の通行者も多いため、安全面を考慮して誘導を行った。



左: 列整備の様子



右: 写真撮影中の様子

【活動内容】

正門前から列整備を行い、先頭から順に携帯やデジタルカメラを預かって写真撮影を代行した。撮影人数や構図を確認し、可能な限り卒業生・新入生の希望に添えるよう尽力した。

【スタッフの所感】

卒業生や新入生にとっての大切な思い出を形に残すという責任のある活動ではあったが、家族、友人と笑顔で記念写真を撮影される姿を見てスタッフもまた晴れやかな気持ちになることができた。撮影にあたって構図や枚数、人数など出来る限り相手側の希望に添えるように努めた。また、この写真撮影ボランティアを通してボランティア・ステーションに興味を持ち、実際に春から一緒に活動をするようになった新スタッフもいるので私達の存在や活動を知ってもらったための一つの契機にもなったのではないかなと思う。

【今後の展望】

今後も大学からの要請に従って写真撮影ボランティアを継続していきたい。一回の撮影に時間を要してしまうという今年度の反省を生かし、写真の構図や枚数を事前に相談して確定させるなど撮影をより円滑に行うことのできる体制を考えたい。

渋谷区清掃活動

【活動場所】

東京都渋谷区周辺

【活動期間】

2015年 4月18日

2015年 10月3日

2015年 12月5日

【参加人数】

スタッフ15名(10月) 10名(12月)

一般参加者24名(10月) 7名(12月)

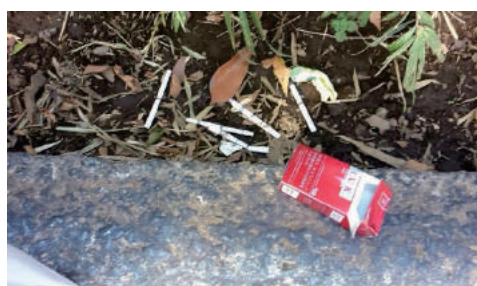


(活動後の集合写真)

【活動背景・目的】

地域部主催で行う渋谷区清掃活動は2013年から行われており、本年も継続して清掃活動を行った。地域部は地域に根ざした活動を行うことをモットーにしており、①私たち青山学院大学の学生が日常生活を送る渋谷区に感謝の気持ちを示し、街の美化に努めることでより良い生活環境を築くこと、②渋谷区に対して貢献したいという想いをさらに強め、渋谷区で過ごす学生生活を充実させること、③清掃活動を通じ、参加者にボランティアがどういうものか理解してもらい、今後のボランティア活動への参加のきっかけになること、この三つを目的として清掃活動を行っている。

渋谷区内、とりわけ青山キャンパス付近の通りは通学路や繁華街ということもあり、多くの人が行き交い、場所を問わずゴミが散乱しているのが現状である。特に歩道脇の植え込み、街路樹の根元など一見目立たない箇所や側溝などの隙間に煙草の吸殻といったゴミが多く見られる。駅や私有地など、場所によっては専門の業者による清掃が行われている箇所もあるが、それだけでは街の環境すべてを維持することが到底困難であり、その他公共部の清掃のサポートを私たちで行いたいと考えている。



左: ポイ捨てされた煙草の吸殻



右: 活動中の様子

【活動内容】

活動場所は3つのルートに分かれて行った。①宮益坂を中心として青山通りの道路を挟んで2つの歩道に分かれて2グループで清掃活動を行った。②青山学院西門を出て渋谷駅新南口に向かう道中にて活動を行い、③青山学院正門を出て代々木公園に至るまでのJR線路両脇付近の路上にて清掃活動を行った。

今年度は、スタッフ・参加者が増えたため、昨年度の活動時よりも、広い範囲にわたって行うことが出来た。それぞれのグループに地域部のスタッフが2・3人つき、グループの誘導・安全確認を行った。

活動時は、周囲の方の通行の妨げにならないように配慮しながら、一列になり、ゴミが特に多い植え込みの近くを中心に清掃をした。

ゴミは、煙草の吸殻や空き缶、空きビンなどが多かった。また、暴風雨があった日の数日後に清掃を行った際は、壊れて使えなくなったビニール傘などが目立った。

ゴミを拾う際に、あらかじめ、ゴミ袋は可燃、不燃、その他の三つに分けて回収し、分別しやすいように工夫した。

活動の最後に宮下公園にて、その他のゴミをペットボトル、ビン、カンに分けたり、壊れたビニール傘の解体作業などを行い、園内に設置されているボランティア清掃ゴミ用集積場所に運んだ。

渋谷区清掃活動

【スタッフの所感】

以前までの清掃活動では一般参加者を募ることがあまりできず、あくまでも部内での活動のような印象であったが、10月の清掃活動では、24名もの一般参加者を募ることができ、活動自体も非常に活気に溢れたものにすることができ、スタッフ側としては充実した活動を提供でき、嬉しく思う。また、このような活動を行うことによって参加者が清掃活動に関して今一度考えなおすきっかけができた、ボランティアをする意義を考える機会をつくることができたのではないかと考える。

だが一方で、大勢での活動には様々な問題と責任が伴うことにも気づいた。まずは、参加者の安全確保である。当然のことではあるが、渋谷区という人通りの多い場所で活動するということはそれなりの交通に関する危険が伴う。活動をより要領よくスムーズに進めるためにはまずは安全確認を行うべきであり、その責任はスタッフにある。スタッフは事前に打ち合わせを重ねて当日の活動に臨むが、打ち合わせの段階でより細かく役割内容を決めるべきであることに気付くことができた。また、渋谷区には我々が予想していたよりも多くのゴミが落ちており活動する意義がまだまだあると強く感じた。そして同じ思いを参加者の方々と共有することができた。その反省を踏まえて、12月の清掃では小規模の活動を実施した。大勢で活動するのは異なり、スタッフがより参加者に対する誘導を円滑に行えた。参加する年に1、2回程度の活動では渋谷区をきれいにすることも通行人の美化の意識も改善することは難しいが、回数を重ねることで良い影響を与えることができるよう、これからも渋谷区清掃活動に力を注いでいく所存である。



(ごみの分別作業中の様子)



(分別したごみの量)

【参加者の所感】

- ・楽しい。何度やってもゴミが多い。
- ・思っていたより大変だった。やりがいを感じた。
- ・一つの道を清掃するだけでも大変だった。
- ・清掃後、集まったゴミの量が思っていたよりも多くてびっくりした
- ・改めて、通っている道に大量のゴミが落ちていて汚いと思った。継続して行うことで、多少なりともほかの人の意識から変えていければと感じる。

- ・実際にゴミを拾って歩くと、普段は全く意識していなかったゴミがたくさん見えてきた。以前は、清掃活動はしたい人だけがすれば良いと思っていたが、活動を通してゴミの多さを実感し、気持ちを改めることができるので、多くの人に体験してもらいたい気もした。
- ・「日本は街にゴミが落ちていない」「街がきれい」と言われていたが、実際に経験するとそうでもないと思った
- ・日本はきれいなイメージだったが、意外と汚くて驚いた。もっときれいな街にしたいと思った。
- ・毎日朝早くに継続して清掃をしている方々に頭が上がらなくなった。
- ・明確な問題点が見えた。→一般参加者を多く募集するため、ボラステの認知度を高める運動が必要。

【今後の展望】

渋谷区清掃は今後も、継続して活動が続けていきたいと考えている。しかし、スタッフの所感でも記述した通り、1回や2回の活動で渋谷区の美化に貢献できない。これまでの活動を見直し、更に渋谷区の美化のために出来ることを考える必要があると感じた。10月の活動ではより多くの参加者とその意識を共有することができた。

広報活動にはSNS(Twitter、Facebook)、ブログ、学生ポータルを継続して使用していく。青山学院大学の学生の清掃活動への関心を高め、参加してもらうため、広報活動も今までよりも早い時期に行い、より多くの参加者を募りたいと考えている。

えびす青年教室・GAYA

【活動場所】

えびす青年教室: 恵比寿社会教育館

GAYA: 幡ヶ谷社会教育館

【活動期間】

えびす青年教室: 毎月第4日曜日

GAYA: 毎月第1日曜日

えびす青年教室クリスマス会: 12月20日

【参加人数】

スタッフ: 12人、高等部ボランティア部員: 数名

(一般参加者も各回数名)



アフリカンダンスをする様子(えびす青年教室より)

【活動背景・目的】

活動の背景は、一般参加者の大学生に知的障がいについて正しい認識を持ってもらうことである。日常生活で知的障がいについて考えることや障がいをもつ方に出会う機会が殆どない大学生に、活動を通して既存の障がいに対する一般的な偏見や誤解を解き、新たな発見をしてもらうきっかけとなるよう、2012年から行っている。活動の目的は渋谷区という身近な地域で知的障がいを持つ方(この活動では“メンバー”と呼ぶ)と関わり、レクリエーションや様々なプログラムを通して参加者に社会教育支援をすることである。えびす青年教室・GAYAの両活動に言えることだが、メンバーが持つ障がいの特徴は個々人によって異なるため、私達大学生が介入することによってボランティア一人当たりの負担が軽減し、なおかつ活動の運営がスムーズになるというメリットもある。更に、ボランティアとメンバーが互いにプログラムを通して時間を共有することで、若い世代である大学生と様々な世代のメンバーが互いに交流できる機会を設けることも重要な目的である。私達は、活動を通してメンバー自身ができることを増やしていくといった自立の手助けをし、参加しているボランティアやメンバーが楽しんでもらえるように尽力している。



左: えびす青年教室の開級式



右: クリスマス会の様子

【活動内容】

主にグループに分かれて音楽や制作活動といった芸術分野から、ダンス等の運動、本格的な調理に至るまで様々なプログラムの補助を行っている。参加しているメンバー個々人のペースに合わせて活動を行うことを第一にしているので、その時のメンバーの体調や反応に注意しながら活動する。例えば、今年度から始まったGAYAでの「写真」がテーマの活動では、メンバーが好きなものを自由な構図で撮影に臨めることが最大の魅力である。加えて、メンバーの自立の手助けとしては「他者への配慮」に着眼したことがポイントである。他者が自分の写真の被写体になってほしいときは、「撮ってもいいですか?」と一声かけることによってほかの人に気配りを促すことを考慮した。また、七夕やクリスマスなどの季節に絡んだイベント、参加者全体で行うプログラムも用意されており、他のグループのメンバーやスタッフとの交流を図ることができる。ボランティア・ステーションの地域部が主催しているえびす青年教室でのクリスマス会については会場の飾りつけをする装飾班やケーキを作る調理班に分けて役割を分担することで準備の説明がそれぞれに行き届くようにした。午後は単語探しゲームと間違い探しゲームを企画し、得意な歌や踊りの披露といった、メンバー自身の出し物もプログラムに組み込んで全体的にメンバー、ボランティアの両方の反応が良好なまま一日のプログラムを終わらせることができた。ただ、当日の時間配分に余裕がなかった点やスタッフ間の連携が不十分だったことが問題点として挙げられる。毎回、活動の終了後はグループのボランティア同士で反省を行っている。プログラムの内容やメンバーひとりひとりのことを考えて話し合うことで次の活動に活かすことができ、なおかつボランティアの連携が円滑になる。

えびす青年教室・GAYA

【スタッフの所感】

一日で行うボランティアであるため、自分ができることは限られてしまうのではないかと考えていた。しかし、メンバーから話しかけていただくことも多く、活動内容によって、メンバー全体の反応に変化がでてくるため、毎回、内容の濃いものだ実感している。また、実際に参加してみると参加するメンバーや社会人のボランティア、運営側の職員さんといった多くの方々が関わって成り立っている中で「いま、自分ができることは何か？」という点を常に意識して毎回の活動に挑まねばならないと痛感した。参加しているメンバーが帰るころに充実感がうかがえる表情になっているのを見ると、今回も参加してよかった、と胸が一杯になる。社会には人とコミュニケーションをとることを苦手とすることや、強いこだわりや物事に過敏に反応することで他者に迷惑がかかってしまうといった特徴を持つ知的障がいの人たちがいる。今日の社会ではそういった「障がい」があるからできないことや欠点が目立ち、障がいに関する一方的な思い込みを持つ人も少なくないのが現状である。しかし、この活動中にメンバーと関わることで人に対してわかりやすく丁寧に伝えることの大切さを学べ、私達大学生が人とのかわり方を見直すこともできるのではないかなと思う。クリスマス会ではいつもより多くの一般参加者(7名)が参加してくれて参加者にも活動意義を示せたと思う。更に、メンバーが「周りと違う」特徴がある一方で逆に私たちの感覚にはない考え方や驚くような才能、こちらへの興味の示し方があることを楽しんで知っていけるところがこのボランティアの最大の醍醐味といえるのではないだろうかと思う。

【今後の展望】

その日の活動中に気づいた点やアイデアがあれば積極的に学生側から意見提示したいと考えている。レクリエーションの内容によってメンバーや社会人のボランティアの反応も変わってくるので、それぞれの内容に対する反応も見つつ、その日に経験したことを活かして活動をより一層充実したものにしていきたい。メンバーへの対応には社会人のボランティアにお世話になることもあるが、自分たちでもっと障がいについて学び、一般参加者にも具体的な活動の注意について十分に説明できるようにしていきたい。また、この知的障がいを持つ方の支援活動において、スタッフが企画する際にメンバーや社会人のボランティアまで配慮しきれていなかったことや自分たちが企画を提示する機会も少ないということが現時点の課題である。まだまだ活動を密なものにしていく余地は十分にあるので、スタッフや運営側の方々と連携を一層強化していく所存である。クリスマス会などでも連携してイベントをより円滑に進められたらと考えている。さらに、普段は考え付かないであろうアイデアを得ることがあるのがこの活動の特徴といえる。活動を通してスタッフの間の考え方が柔軟になることで、他のボランティアの企画の際に役立てて新たな活動にも活かしていきたいと考えている。メンバーにとって有意義な時間を作り出すためにも、活動に関与する人の意見を取り入れること、「地域に根差した活動」という強みを生かして実際の一般参加者の規模も大きくしていくことが今後、更に重要になってくると考えている。



左:韓国風手巻き
寿司づくり



右:閉級式での様子



上:お互いの顔を描いて交流する様子

新スタッフ合宿

【活動場所】

岩手県陸前高田市
宮城県塩竈市

【活動期間】

5月29日(金)～31日(日)

【参加人数】 19名



(初めて見上げる“奇跡の一本松”)

【活動背景・目的】

今年度新たに東北部に迎えたスタッフが、夏期プロジェクトで一般参加者をリードしていくことができるように実際に活動を行うところに訪れる。この合宿に参加することで、新スタッフはこれからどのようにボランティア・ステーションのスタッフとして活動していけばよいのかを自分自身に問いかける機会を得る。また、防災についての勉強会を行い自分たちの防災についての理解を深め、夏期プロジェクトを行う上でのスタッフとしての基本知識を身につける。



左: 塩竈プロジェクトの活動
拠点となるブルーセンターの
施設紹介

右: 先輩から学ぶ新スタッフ



【活動内容】

(10pt約700字)

活動は1泊3日で行い岩手県陸前高田市と宮城県塩竈市を訪れた。陸前高田市では、東日本大震災の津波で流された写真などをもち主や身内の方々に返却する活動をしている“思い出の品返却所”、約7万本の松の木の中で津波に耐えて残ったことで有名となった“奇跡の一本松”、軽度の知的障がいを持っている方が一般就労を目標としたプログラムを行っている“あすなるホーム”、東日本大震災を忘れてはいけないという強い思いから震災遺構となった“TAPIC45”を訪れた。また防災に関するディスカッションを勉強会として行い、災害時に自分たちが何を優先するべきなのか、意見を交換した。塩竈市では“塩竈市立病院”、夏期プロジェクトでお世話になる“香津町保育所”、古くから地元の方々と深く関わっている“志波彦・塩竈神社”を訪れた。野々島では夏期プロジェクトの際に宿泊させていただく“ブルーセンター”を訪れ、また避難経路の確認も行った。

新スタッフ合宿

【スタッフの所感】

テレビや新聞などのメディアを通じてではなく“現地の方の思い”を直接聞き復興がいかに大変で時間がかかることを改めて感じた。陸前高田市では一日に2万㎡、10トントラック4000台分の土を運び出すことの出来る『夢の架け橋』により土地のかさ増しが急ピッチで進んでいた。また塩竈市を訪れる際、復旧したばかりのJR仙石線に乗ることができ、ハード面での復興が進んでいることを実感した。しかし、復興に終わりの兆しが見えているかのような塩竈市でもソフト面でのボランティアが必要とされている。震災から5年が経ちボランティアのニーズがハード面からソフト面へと変わってきている。

【今後の展望】

東北について書籍やメディアを通して考えることは今までにもあったが、現地に行くのは新スタッフ全員初めてであった。夏に活動を行う陸前高田市と塩竈市を実際に訪れ、先輩方から活動についてお話を伺うことで、東北部のスタッフとして行う今後の活動を考える良い機会を得た。また、防災についてのディスカッションを行うことで自分たちの防災についての基本知識を身につけることができたため、今後も継続して夏の活動に入る前に新スタッフにむけた合宿を行っていきたいと思う。



左: 塩竈神社にて、
塩竈の歴史やこれまでの活動を学んだ

右: 陸前高田市にある二又復興交流センターの様子。
防災についてディスカッションを行いました



ボランティアフォーラム

【活動場所】

青山学院大学 17411教室

【活動期間】

2015年6月13日(土)

【参加人数】

62人(本学関係者を含む)

【参加・協力団体】

復興庁、しづやボランティアセンター、NPO法人NICE
SHANTI SHANTI、Message for 3.11東日本大震災復興支援愛好会



(終了後の集合写真)

【活動背景・目的】

復興庁は日本全国の大学生が、被災企業で職業体験を実施し、職業体験を通じて感じ・学んだ被災地及び被災地産業の現状を、全国各地で発信することで、被災地産業の振興や被災地全体の復興に繋げることを目的とする復興支援インターンを行っている。2015年春に青山学院大学の学生が参加した復興支援インターンの報告会と合わせて、青山学院大学内でボランティア活動をしている団体の活動報告を行うために開催された。加えて、復興庁の参事官の方をお呼びしてお話を伺うことで東北の復興の現状に対する知識を深めること、また、普段はあまり同じ活動を行うことがない青山学院大学内のボランティアに興味がある学生が一堂に会し、交流を深めることも目的とした。



左写真:復興庁の方のお話



右写真:パネル展示の様子

【活動内容】

まず始めに復興庁の方から「宮城の復旧・復興の現状」と題して、基調講演をしていただいた。その後復興支援インターンの参加者からの活動報告を行った。復興支援インターンの参加者は南三陸町チーム、亘理町チーム、石巻チームに分かれており、それぞれに参加した学生が実際に行った作業の様子、実際に現地の企業の方と共に活動をして感じたこと、復興支援インターンを行った自分たちができる東北復興支援などについて発表した。

後半の部として、ボランティア団体の活動報告、個人でボランティアを行っていた卒業生の活動報告、発表団体の代表によるパネルディスカッションを行った。活動報告を行った団体はMessage for 3.11東日本大震災復興支援愛好会、ボランティア・ステーション、SHANTI SHANTIの3団体である。Message for 3.11東日本大震災復興支援愛好会、ボランティア・ステーションは東日本大震災復興支援活動についての報告を、SHANTI SHANTI、個人でボランティア活動を行っていた卒業生は国際ボランティアについての報告を行った。パネルディスカッションではボランティアに出会ったきっかけ、学び、意義などについてそれぞれの学生が発表した。

また、メイン会場外のブースでは国際ボランティア団体NICEの方や、しづやボランティアセンターの方にボランティア情報案内を行っていただき、ボランティア・ステーションや復興支援インターンの活動報告のパネル展示も行った。

ボランティアフォーラム

【スタッフの所感】

ボランティアフォーラムを行うことは初めての試みであったが、ボランティア・ステーションとしてフォーラムの運営に関わらせていただいたこと、また対外的に自分たちの活動について報告する機会をいただいたこと、青山学院大学内でボランティアに関わっている学生と一緒に会える機会がもてたことは非常に貴重な経験となった。普段、団体の中で、また現地の方とコミュニケーションを取りながらボランティア活動を企画し運営しているけれども、まったく自分たちの活動について知らない外部の方に活動を紹介するためにどうすれば伝わるのか、などを検討することでまた新たな視点を持つことができたのではないだろうか。国際ボランティアについても、ボランティア・ステーションが行っているようなソフト面での活動ではなく、ハード面での活動を行っている団体の報告を聞くことで自分たちの活動について見直すきっかけにもなった。

復興支援インターンも自分たちが行っている東北復興支援とは少し異なり、企業に直接入って実際に働くということを行っているため、新しい視点から東北の産業について考えることができた。自分たちも企業と協力することで何か新しい活動を見出すことについて少し考えてみても良いのではないかと、思うことができた。

【今後の展望】

この一回にとどまらず、定期的にこのようなボランティアフォーラムを開くことができれば、私たちの団体の成長にもつながるのではないだろうか。その理由は所感で述べた通りである。また、他の団体を巻き込む形ではなくとも、私たちの活動についてまったく知らない外部の方々に伝える機会が必要であると思う。

このような企画を行う際には集客をする必要があるため、青山祭など、外部の方がたくさん来る期間に合わせて実施することで、より多くの方々にボランティア・ステーションの活動について知ってもらうこと、ボランティア活動について興味を持ってもらうことができるのではないだろうか。そのためにも今後も充実した活動を行っていくことができるよう、スタッフ一同邁進していく所存である。

右：パネル展示の準備をしている様子



左：SHANTI SHANTIの発表

新しい人と出会う夏。
新しい景色をみる夏。
新しいことをする夏。

夏期ボランティア、募集します。
青山学院大学ボランティア・ステーション

夏期ボランティア説明会

＊青山キャンパス
6/18、6/22 18:40～ (17411教室)
＊相模原キャンパス
6/22 18:40～ (教室)
※予約不要
説明会について何かご質問がある方は、
agu.vsta.2015@gmail.comまでご連絡ください。
皆さまのご参加をお待ちしております！

青山学院大学ボランティア・ステーションでは、ブログ・Facebook・Twitterなどでも広報を行っております！

当団体についての情報を発信しておりますので、興味のある方はぜひご覧ください！

ブログ：<http://ameblo.jp/agu-vsta/>
Twitter：[@agu_vsta](https://twitter.com/agu_vsta)
Facebook：<http://www.facebook.com/agu.vsta>

東北部

・塩竈プロジェクト
活動内容：経済復興、教育支援

・陸前高田プロジェクト
活動内容：地域支援、教育支援

国際部

・フィリピンプロジェクト
活動内容：衛生教育、教育支援



夏休みはちょっと忙しい・・・泊まりでボランティアは難しい・・・
そんなあなたに！！

＊渋谷区清掃 **6/27(土)実施**

※詳細は後日団体のブログ、Facebook、Twitterにて告知いたします。

＊えびす青年教室、GAYA **毎月第一日曜日、第四日曜日**
知的障がいのある方が参加する渋谷区のレクリエーション事業のお手伝いをします。
参加応募は、団体のブログのボランティア募集記事からお願いします。

塩竈プロジェクト



塩竈プロジェクトリーダー
日本文学科2年
今野 友彰

「塩竈プロジェクトにつくられる」のではなく、自分が「塩竈プロジェクト」をつくる。
これはもしかしたら私が意識的ではなく、潜在的に一番考えていたことかもしれません。

東日本大震災を機に設立した弊団体。いまでは地域、国際と活動の範疇を広げていますが、元を辿れば全ては東北支援から始まったわけです。言わずもがな、弊団体の活動の中心は今でもこの東北にあります。それ故に生半可な気持ちでは務まらないのは勿論、活動期間や人数を見てもこのプロジェクトは規模の大きさが見て取れると思います。

「塩竈プロジェクト」という大きな枠組みが先行し、そこから企画や内容を考えるのはとても簡単で、楽なことだったと思います。

長期間活動し、多くの学生を巻き込んでいるからそれでいいのか。私はそうではないと考えます。期間や人数といった表面的な要素だけが先走るのではなく、だからこその内容も充実させる必要がある。一つ一つの活動や全体でのミーティング、こういった細かい要素が一つになった結果としての塩竈プロジェクトがある。こう私は考えています。

1年生の11月に前リーダーから打診され、右も左も分からない状態からスタートし、今日までを振り返るとどうしても“大変だった”という印象は拭えません。それは否定できません。でも、企画をつくっていく過程での様々な方々との出会い、活動中に見られた学生たちの笑顔、そして塩竈市の皆様からいただいた「ありがとう」のことば。これらに比べたら自分の苦労なんてちっぽけなものだったと実感しています。

またもう一年、塩竈プロジェクトのリーダーとして活動していくことになりました。震災発生からは5年を迎えます。もう一度、宮城県塩竈市という場所で活動を行う真意を自分なりに考え、一路邁進し、笑顔で後輩にバトンを託したいと思います。

* 本プロジェクトは、公益財団法人大和証券福祉財団からの「災害ボランティア活動助成」によるご支援を頂きました。

保育

【活動場所】

東部保育所、香津町保育所、新浜町保育所、清水沢保育所、藤倉保育所

【活動期間】

第1陣:8月3日(月)～7日(金)

第2陣:8月10日(月)～14日(金)

第3陣:8月17日(月)～21日(金)

【参加人数】

計3陣/各保育所2名ずつ、計30名



水遊び

【活動背景・目的】

保育士の人手不足という問題は待機児童の増加などから判るとおり、深刻な全国の問題となっている。特に塩竈市も含め東北では東日本大震災の影響により、共働きの人が増えたことで子どもを保育園へ預ける必要性が高まり、結果、保育士さん一人ひとりへの負担が増大している現状がある。この人手不足という問題に対し、夏期だけでも私達が保育士補助という形でお手伝いすることで、保育士さんの負担を軽減することを第一の目的とする。更にこの負担軽減により、保育士の就労環境を整え、ゆとりを持った生活を送ることが可能になり、子ども一人ひとりと向き合い、対話する時間を増やすことを目的としている。この活動はあくまで保育士さんのお手伝いであり、子どもと遊ぶこと“だけ”が目的ではない。より良い保育環境の構築のために園内整備等も行う必要がある。また、普段接することのない私達大学生と触れ合うことで、楽しく新鮮で刺激的な日々を過ごしてもらい、子どもの心のケアも目指す。



左:子どもたちと昼食



右:プール設営

【活動内容】

従来活動してきた東部保育所、香津町保育所に加え、今年度より清水沢保育所、新浜町保育所、藤倉保育所でも活動を開始し、市内5か所の保育所で活動を行った。園内の草むしり、教室の掃除、窓拭き、プールの設営・片付けといった環境整備から、子どもの遊び相手や寝かしつけ、工作のお手伝い、紙芝居などの園児と関わる活動など、保育所ごとにその活動内容は多様であった。

また今年度は、私たちから子ども達へ「普段の保育生活とは少し違った何か楽しいこと」を提供しようと、学生達でイベントを企画、実施した。行ったイベントは宝探し、水鉄砲、しっぽとりゲーム、コマ作り(紙製)、糸電話である。どのイベントも活動前から保育所の先生方と連絡をとりながら準備を進めた。先生方からアドバイスをいただきながら安全面を考慮して行い、子ども達にはとても好評のようであった。また、保育所ごとに震災当時のお話、震災以降の塩竈市の保育事情や防災対策についてのお話もお聞きした。

保育

【スタッフの所感】

初日は「保育士さんとうまく連携をとれるのか」、「子ども達をうまく相手できるのか」など不安な気持ちでいっぱいであったが、到着すると先生方が温かく迎え入れて下さり、子ども達も元気に話しかけてきてくれて、最終日まで楽しく活動できた。今年度から先生方の負担軽減に加えて、私たち大学生ならではの視点で面白い遊びを提案できるのではないかと考えていたが、やはり学生達単独で行うのは非常に難しく、子ども達のこころを掴むことに慣れている先生方のアドバイスやお力をお借りしながら準備を進め、実施した。事前連絡の齟齬もいくつ



かあったものの、安全面を考慮しつつ実施し、多くの子どもたちを楽しんでもらえた。イベントは今まで以上に私たちと子どもたちとの距離が縮まる良い機会となったので、来年度も引き続き行いたい。また震災から4年が経過したが、震災の教訓を生かし、避難訓練を各家庭・親子でも行うなどの取り組みが為されており、どこの保育所でも子どもの命を守るために万全の防災対策がなされていると感じた。活動全体を通して、怪我や事故なく安全に3週間活動が出来た。子どもたちの相手をするには問題はなかったものの、保育所によっては人手不足が感じられず、自分たちが役に立っていると実感できずに、東北で保育をする意味について参加者とともに悩むこともあった。しかし現地の保育士さんから「塩竈のために何かしたいと思って来てくれることが何より嬉しい」、「本当に助かった」といったお言葉をいただき、私たちの活動はちっぽけではあるが、支援になっていると感じることが出来た。教育全般に言えることだが、活動の成果は短期間では表れないので今後も継続した活動が必要である。



しっぽとりゲーム

【参加者の所感】

・保育の活動で子どもたちと触れ合う中で、子どもたち一人ひとりの発育の特徴や家庭環境に応じて接しなくてはならず、これには信頼関係が成っているからこそであり、1週間では真似できなかった。だから私たちにできることは、彼らと一緒に遊んであげるなど、彼らの心に寄り添ってあげることで、親と過ごせる時間が短い寂しさを紛らわすことができていたら嬉しい。また、各教室には防災マニュアルとヘルメットが装備されており、4年前の震災を経験していない、もしくは経験していても覚えていない子どもたちの中にも、“防災”が身近なもの

なっていると感じた。東北出身で実際にあの震災を経験した者として考えたことは、私たちが後世に伝えていかなければならない震災の恐ろしさや教訓と知識である。私たちが保育園に行くことで子どもたちがこの先、青い服を着たお兄さんやお姉さんを思い出し、少しでも“防災”について考える機会になってくれれば、保育ボランティアの一番大きな意味であり、確かな価値だと思う。(国際経済学科1年)

・保育の活動初日は勝手がわからず、お手伝いに来ているのに足手まといになっている気がして情けなかった。しかし毎日の活動後のミーティングで保育士さんの負担について考えるようになった。今までボランティアを受け入れる側の負担は考えたことがなかったが、ただボランティアをしたい気持ちだけではダメだと今回思った。この活動を通して、ボランティアに行くだけでいいことをしている気になってはただの自己満足になってしまうと気づかされた。多くの人と出会い、いろんな話をしていく中で、自分にとっても良い経験となった。来年もまた同じ保育所で活動したい。(心理学科1年)

【今後の展望】

今年度より5か所で活動を行ったが、各保育所によって活動内容が異なり、活動内容によっては表面上では人手不足の問題や保育士さんの負担の大きさを感じにくいということもあった。そのため、事前にどこの保育所でどんな支援を必要としているのかをより明らかにしておくことで、本当に自分たちが役に立つことが出来、参加学生も実感すると思う。またそれぞれの保育所に沿ったボランティアを展開することができるので、より質の高いボランティアを現地にも参加学生にも提供することができると思う。更に今回の活動を通して、園内整備などの肉体的な作業も多く、保育現場では意外にも男手を多く必要としていることも知った。現実的に女性優位の職場で、男性の先生を増やすことは金銭面など世間一般に浸透していくことは難しいが、私たちボランティアを派遣することは可能である。そのため募集段階から積極的に男手の必要性も訴えかけていきたい。震災から4年が経過し、ボランティアの需要は減ってきてはいるものの、需要がある限り、少しでも支援になるのであれば、「ボランティアをさせていただいている」という感謝の気持ちを持ちながら、継続的に活動していきたい。そして子ども達が成長したときに、私達のことを思い出してくれたり、「自分もボランティアをしたい」と思ってもらえたら嬉しい。何より未来につながるボランティア活動をしていきたい。

学童保育

【活動場所】

塩竈市立第一小学校
" 月見ヶ丘小学校
" 玉川小学校

【活動期間】

第1陣:8月3日(月)~7日(金)
第2陣:8月10日(月)~12日(水)
第3陣:8月17日(月)~21日(金)

【参加人数】

計3陣/各所3名ずつ、計27名



子どもと遊ぶ様子

【活動背景・目的】

現在塩竈市内の学童保育所では、東日本大震災と今年4月からの国の法律変更(※)の影響で学童利用者が例年に比べ増加している。そのために学童保育の指導員が著しく人手不足であり、児童一人ひとりと向き合う事が難しくなっている。そんな学童保育に私達学生がお手伝いとして入る事によって、指導員の先生方の負担軽減や児童一人ひとりと向き合う時間を増やす事を目的とする。また、大学生だからこそ出来る事を行い児童に普段と違う体験をして貰う。

※2012(平成24)年に制定された「子ども・子育て支援法」により「児童福祉法」が改正されたことで、2015(平成27)年4月から学童保育の対象が「小学校に就学しているおおむね10歳未満の児童」(新3年生まで)から、「小学校に就学している児童」(6年生まで)に変更された。



左:子どもとおしゃべり



右:子ども達の麦茶を作る

【活動内容】

夏休み期間中に開かれている市内3ヶ所の学童保育所で、児童との交流や学習サポート、指導員の方々のお手伝いをした。具体的には、児童と園内で一緒に遊んだり、夏休みの課題の補助といった内容である。また、活動期間中には私達が企画したイベントも行った。このイベントを行うに当たっては、何度も学生間での話し合いや現地との連絡を行った。

また、指導員の方々のお手伝いでは、机の設置などの普段指導員の方々が行っている業務を中心として積極的にお手伝いをさせて頂いた。

学童保育

【スタッフの所感】

まず、児童との交流について述べる。暑い中屋外で活発に遊ぶ児童が多かった。雲梯や昇り棒を好む児童が多く、先生方が、児童が怪我をしないように目を離さずに見守っていたのが印象的であった。私達学生は、一言声を掛けつつ様々な子に目を配りサポートした。また、屋内では学習サポートを行った。淡々と課題をこなす児童もいれば、教室を走り回る児童もいた。後者のような児童には、勉強を苦とするのを避けるために「机に向き合う」ことを重点として考え、勉強を強いることはしなかった。結果、のびのびと学習している児童が多かったように思う。そしてイベントでは宝探しと運動会を行った。宝探しでは、隠されたお宝を一生懸命に探す児童達が印象的であった。運動会では徒競走、借物競争、大縄、台風の目を行った。児童達は大きな声を張り上げて自分のチームを応援していた。イベントによって、毎日学童保育所で同じ生活を送っている児童達に刺激を与えられたと感じた。いつも同じ遊びをつまらなさそうに行っている児童達が思いっきり私達と楽しんで遊んでいる姿を見て、終わった後に「楽しかった」「またやって」などの声を耳にしたことはとても嬉しく、いつもと変わらない学童保育での夏休みに少しでも楽しかったという思い出を作ることが出来たかなと思った。活動の結果、先生方が他の仕事が出来た時間がほんの少しだけ増えたように感じた。

最後に、今回活動して「先生方の人手不足」を痛感した。先生方のお仕事は、児童達の体調管理や保護者との連絡、日々の業務など、とても多い。他の学童保育所と兼務する先生もいらした。児童一人ひとりと向き合って相談事や他愛もない話さえる時間が無いように感じた。心も身体も成長期に差し掛かる中、親と接する時間が少ない児童達にとって、大人が向き合うことは重要だと考える。「今日友達と長縄をして楽しかった」や「折り紙上手く折れなかった」などの些細なことでもいい。そんなちょっとした話が出来る大人の存在があるだけで、子ども達は自分らしく成長でき、ちょっとした変化に大人は気づくのだと思う。私は活動中に、子ども達が何度も何度も楽しそうに満面の笑みを浮かべながら起きた出来事を一生懸命に話してくれたことにとっても朗らかな気持ちになると同時に、自分の幼少期を思い出した。辛かった時に恩師がわたしの異変に気づき、時間をかけて自分と向き合ってくれたことがある。わたしもあの時の恩師のような存在になりたいと感じた。そのためには、継続した活動が必要だ。何度も同じ土地や場所を訪れ、子ども達や先生方と信頼関係を築くことによって、少しずつ子ども達の心に寄り添っていききたい。



子どもとの触れ合い



子ども達にプレゼントを渡す

【参加者の所感】

・自分達にできることは「知ること」「考えて行動すること」だということなのかなと思った。これからも復興支援は続いていくのだろうけど、学童保育での活動を通じて様々な背景を持つ子どもに、柔軟に対応していくことが大切だと思う。(教育学科2年)

・ボランティアは一時的なもので、私達が力になることが出来るのか、役に立てるのかと疑問に思ったこともあったが、学童の先生からの感謝の言葉、そして子ども達の笑顔を見て、その不安も吹き飛んだ。ボランティアというかたちで行ったが、

私達の方が多くのことを学べ、本当に素晴らしい経験が出来たと思う。(教育学科1年)

・学童保育は初めての経験だったが、子ども達が抱えている問題や、先生方の苦勞を知り、まだまだやらなくてはいけないことがたくさんあると感じた。同時に、子ども達のまっすぐで純粋な姿に触れ、この子ども達がきちんと素敵な大人になれるようにのびのびと過ごせるように、私達にできることがあるならば、できる限りしてあげたいと思った。学童保育の現場にもっと人手が増え、環境が整うことが必要だ。(経営学科3年)

【今後の展望】

今年(2015年)3月に、初めて体験という形でスタッフのみで始めた学童保育であったが、無事に活動を夏期に行うことが出来た。活動後、指導員の先生方や子ども達からも「また来て欲しい」という言葉をいただき、各陣5日間の活動を終え別れの切なさを感じ、今後の活動も継続して続けていきたいと感じることができた。

先生方の仕事量は多く、もはや待機児童は何も保育園や幼稚園だけの問題ではない。毎日同じ学童保育所に通い、同じ遊びをして飽きてしまっている子ども達に対しても、まだまだ出来ることは多々あると感じた。

今後活動を継続するにあたり、さらに私達が活動する夏休み以外にも子ども達に刺激になるような活動を実施していきたい。そしてまた青学生が同じ学校に二度三度と訪れることで、現地の方々との信頼関係をより強めていきたい。自分自身もまた同じ学童保育所を訪ね、子ども達の成長に携わっていききたいと思う。

サマースクール

【活動場所】

塩竈市立第一中学校、第二中学校、
第三中学校、玉川中学校

【活動期間】

第3陣: 2015年8月17日(月)～21日(金)

※第三中学校のみ8月18日(火)～21(金)

【参加人数】

各学校5名ずつ、計20名



玉川中学校でのサマースクールの様子

【活動背景・目的】

夏休みに各中学校で行われるサマースクールにおいて、大学生が学習指導のサポートをすることにより、生徒の学力向上を目指す。普段、大学生と触れ合う機会の少ない塩竈市内の中学生に、私たち大学生がサマースクールをきっかけとしたコミュニケーションを図ることにより、彼らの好奇心を刺激し、勉強の意欲を高める。また、先生方よりも年齢が近い立場であることを活かし、勉強のことや進路のことなど異なる背景を持つお互いの交流を通して新たな興味を引き出し、違った角度からアプローチすることで、生徒自身の将来に対する考えの幅を広げる。

加えて、先生方から直接震災当時のお話を伺うことで、東北における教育現場に対する理解を深めると共に、今後の塩竈市の防災教育について考える契機とする。



左: 玉川中学校のサマースクール

右: サッカ一部練習に参加



【活動内容】

各中学校において、午前にはサマースクール(生徒の自習へのアドバイス)を行い、午後は部活動への参加・見学を行った。

サマースクールでは、生徒が自習している際に出てきた疑問点や、苦手・不安と感じている箇所を中心に学習指導を行う。問題の答えの導き方や、計算の方法など具体的なものから、効率の良い勉強法や各教科の勉強する際に気をつけるポイントを教えるなど、サポート内容は多岐にわたる。ここでは主に、生徒とクイズ形式での学習方法など「大学生だからできること」を大切に、サポートすることを意識した。一週間という短い期間で「生徒たちに何を伝えられるのか」を常に考えながら行う活動となる。午後には部活動を見学・参加し、生徒との交流を深めた。ここでの交流は、翌日のサマースクールに活かし、生徒とより近い距離でコミュニケーションを図ることにもつながる。これにより、普段からあまり大学生と関わることのない中学生が私たちに対して抱く「東京からきた大学生」という壁を乗り越え、信頼関係を築き、より積極的に生徒から質問をしてきてくれることを目指す。

また、先生方から直接震災当時のお話を伺うことで、私たちの経験していない、震災当時の学校の様子・生徒の様子など、被災地における教育現場の現状の理解を深めた。

サマースクール

【スタッフの所感】

私は第三中学校で活動を行ったが、驚きと発見の連続だった。私は中高と私立に通っていたため、公立中学校は想像でしかイメージができず不安もあった。だが、活動初日から生徒が積極的に質問してくれてきたこともあり、私の不安や緊張も解け、私からも休み時間に積極的にコミュニケーションを図ることができた。自分と異なる環境で育ち、学んでいる生徒と関わることで、新たな発見があった。また、私自身「先生」と呼ばれる機会が今まであまりなかったのも、その点で新鮮さを感じた。また、第三中学校には特別支援学級があり、そこでのサマースクールの活動にも参加させていただいた。ここでの活動は、将来教員を目指す私にとって大きなものを得た活動であった。

生徒への学習指導の中で感じたことは、「学力格差」だ。これは、生徒個人だけの問題だけでなく、各学校や地域・家庭の周辺状況によって異なる。環境も異なれば、勉強・学力というものの捉え方が異なって当然だが、この考えの違いに活動を通して改めて気付かされた。そして先生による震災当時のお話は私の心に大きく響くものがあった。学校として、震災をどのように扱うかはそれぞれに異なっていて、「災害時は教員の判断が生徒の運命を決めることになる」ということが深く印象に残っている。サマースクールの活動中にも、震災の話をしてくれる生徒がおり、私たち東京の大学に通う大学生と市での震災に関する時間の流れの違いをまざまざと実感した。



第三中学校メンバーと宮城教育大学の学生



サッカー部の練習に参加

【参加者の所感】

・ずっと小学校か中学校の先生になりたいと考えていたが、どちらを選択しようか迷っていた。けれどもこのサマースクールに参加し、部活や勉強に励む生徒を近くで見て、自分も頑張らなければと強く思った。生徒に教える職業が教員であると思うが、生徒からもいろいろと教えられるのが中学校なのかなと感じた。このサマースクールをきっかけに、私は中学校の先生を目指そうと思った。(教育学科1年)

・3年間継続してサマースクールに参加できてよかった。同じ中学校で活動することで、生徒の成長を見ることができ、教職

員の方々とのコミュニケーションも深めることができた。また、サマースクールでの教育支援は農業や漁業の支援とは異なり人を相手にする活動であったため、塩竈の方々の温かさや純粋な点を見つけることができた。そして、当然のことではあるが生徒は一人ひとり個性が異なるため、相手の立場に立って活動することが難しくもあり、貴重な経験になった。さらに、部活動に参加したことで、授業では関われなかった生徒とも関わることでよかった。(教育学科3年)

・去年参加した経済の活動と違い、一ヶ所5人という少人数で活動したことによって、方向性の確認やフィードバックなどを大変意見を出しやすく、また団結感も生まれた。今回初めて教育支援に参加し、本当に教育の楽しさというものを実感した。正直今回私が教えた生徒が、実際に問題を解けるようになったかはわからないが、それでもわかる・できることの楽しさを感じてくれる生徒がいてくれたら嬉しいと思う。部活動でも先生や生徒とコミュニケーションがとれて、奉仕活動というよりむしろ私が得るものが多い活動だった。(教育学科2年)

【今後の展望】

教育支援は、目に見える結果を得ることは難しい。今回、私たちが行った活動が生徒たちの将来につながるのかも、正直今は分からない。教育支援が難しいものと言われる所以である。普段は関わりのない東京の大学生と関わりを持ったことで、塩竈の生徒に何か刺激を与え、このことをきっかけとし、少しでも勉強に関する意識が変われば幸いだと思った。

そして、この活動で最も重要なことは支援の継続だ。支援を継続していく先で、生徒の中に「今年の夏も塩竈に青学生が来た」といった意識が生まれてくれれば嬉しいと思う。また、被災地・東北で教育支援を継続した先で見つけた発見をフィードバックし、活かしていけたらと思う。私たちボランティア・ステーションと中学校との距離感も今後大切にしていかなければならないポイントだと感じる。それは、より一層お互いの連携が取れば、よりニーズに合った活動を行うことができるのではないかと感じたからだ。そのため、今後も「私たち学生ボランティアに何ができるのか」を熟考しながら、継続した支援を行っていきたい。

けやき教室

【活動場所】

塩竈市適応指導教室(けやき教室)

【活動期間】

第1陣:8月3日(月)~7日(金)

【参加人数】

3名



けやき教室の外観

【活動背景・目的】

はじめに、宮城県は震災以前から全国のなかでも小・中学校の不登校の児童生徒の割合が高く、震災後さらに増加傾向にある。またそのなかでも、私たちが活動を行っている塩竈市は、宮城県内でも不登校の児童生徒の割合が高いという深刻な状況にある。今回活動を行ったけやき教室とは、様々な事情で小学校や中学校に通えなくなってしまった子どもたちが通う教室で、そのような子どもたちに安心できる居場所を提供し、また学習指導や体験活動を行うことで学校に復帰できるよう支援している場所である。しかし子どもたちは普段から常駐している指導員の方々と過ごしているために、環境が変わらず新たな刺激が得づらくなっていたり、指導員とは年齢が離れていることでなかなか打ち解けられなかったりする現状がある。

そこで、子どもたちとも年齢が近く、普段はあまり関わることの少ない私たち大学生が入ることで、いつもとは異なる環境や新たな刺激を得られる場を提供し、まずはけやき教室に通おうという意欲を持ってもらう。また、私たちが積極的に子どもたちと関わることを心がけたり、一緒にイベントを行ったりすることで、コミュニケーションをとりつつ一人ひとりの社会復帰を後押しできるようにする。



左: イベントの準備

右: イベント中



【活動内容】

はじめは子どもたち一人ひとりの学習ペースに合わせた学習支援を中心に活動することを予定していたが、夏休みに入っていて登校してくる子どもたちが少なく、また学習面に関しては専門の指導員の方が指導をされていたため、私たちは遊びやスポーツを子どもたちと一緒にすることを中心に活動した。具体的には体育館で指導員の先生方も交えてみんなでバドミントンや卓球、キャッチボールをして体を動かしたり、教室内でけん玉やダーツ、トランプなどをしたりして遊んだ。不登校の子どもたちは家にいるとどうしても体を動かす機会が少なくなってしまうため、思いきり体を動かして日頃のストレスを発散できるようにしている。それから、けやき教室に通う子どもたちは人と関わるのが苦手、うまくコミュニケーションがとれない子が多いが、スポーツや遊びを通して楽しみつつ自然とコミュニケーションをとれるようにしたり、複数人で何かをすることで協調性を身につけられるよう工夫したりすることが大切になる。またその他活動以外にも、けやき教室の室長さんから不登校の子どもたちに関することや先生自身が指導員になったきっかけ、けやき教室においてこれからどのような取り組みをしていきたいかなど、とても貴重なお話を伺うことができた。

さらに今年度は、指導員の先生方からみんなで楽しめるイベントをやってほしいという要望をいただき、活動前から連絡を取りつつ企画と準備をした。子どもたちからのリクエストをもとに「あやとり」、「射的」、「ヨーヨー釣り」、「おもちゃすくい」の4種目を企画し、準備の段階から子どもたちにも手伝ってもらい、最後はみんなで一緒に楽しむことができた。

けやき教室

【スタッフの所感】

最初の2日間は私たちもどのように子どもたちに接していいかわからず戸惑ってしまう場面や、消極的になってしまう場面が多々あったが、指導員の先生方の子どもたちへの接し方を参考にし、私たちから積極的に関わろうとすることで、少しずつ距離を縮めることができた。しかし、なかには初対面の人に積極的に関わられることを苦手とする子もあり、遊びに誘ってもなかなか参加してくれなかった。だがそういった子に対しては、様子を見つつ指導員の先生の指示を仰ぎ、まずは自分たちがその遊びを楽しんでやっているところを見せ、その子が参加しやすい雰囲気を作り出すなどの工夫をした。バドミントンや卓球は普段からよくやっているようで子どもたちはとても上手く、夢中になって生き生きと取り組んでいる姿を見て私たちも元気をもらった。このようにいつもはコミュニケーションをとるのが難しい子も、スポーツや遊びなど自分が好きなことや得意なことに取り組む中で笑顔を見せてくれると、私たちも嬉しさと達成感を感じることができた。指導員の方がおっしゃっていたのだが、不登校の子どもたちは家で過ごす時間が多く、体を動かす機会が少ないという。その影響もあってか、実際にけやき教室に通う子どもたちも自分からスポーツをしたいと私たちを誘ってくれたり、一生懸命に体を動かしていたのが印象的であった。このように、けやき教室に来た時だけでも思いきり体を動かすことで、運動不足解消やストレス発散につながっているのではないかと実感した。活動中に行ったイベントに関しても、準備の段階から一緒に作り上げ成功させることができた。普段子どもたちはそれぞれ別の遊びをしていることが多いため、みんなで一つの遊びをすることができて指導員の先生方も喜んでくださった。5日間の活動で様々な子どもたちと関わったが、どの子どももスポーツや絵が得意だったり、手先が器用で工作が上手だったり、ピアノが弾けたりと、それぞれが素晴らしくて誇れるものをもっていることに気づかされた。しかし同時に、それらを外で発揮できないことがもったいないとも感じた。ただ、けやき教室ではそのような一人ひとりの才能や個性を引き出す工夫がなされていて、指導員の先生方も常に子どもたちのことを考え行動されている印象が強かった。

5日間という短い期間であったが、私たちが入ったことで活気が出たり、イベントなどいつもはなかなかできない遊びができたりと子どもたちにとっては新しい刺激を感じることができたのではないかなと思う。また、私たちにとっても大変貴重な経験となり、改めてけやき教室のような場所の重要性や必要性を感じることができた。

【参加者の所感】

私は塩竈市の復興ボランティアにおいて、けやき教室という不登校の子どもたちと触れ合う活動に参加した。最初は右も左もわからない状態で子どもたちと話そうとしたが、色んな性格、状態の子がいたのでうまくコミュニケーションをとれなかった。しかし、班の人たちと反省を踏まえ、様々な試行錯誤をした。具体的な案としては、話しかけすぎるとプレッシャーを与えてしまい子どもたちが委縮してしまうので、スポーツやゲームを通してコミュニケーションを図ったり、縁日など子どもたちが伸び伸びと楽しめる空間を作ることにより力を入れた。先生方のご協力などもあり、どれも無事成功し、距離を縮めることができた。個人的に、時間が経つにつれ全く話さなかった子が話しかけてくれたり、帰り道についてきて一緒に帰ったりしたことが嬉しく、ボランティアのやりがいを感じられた。

また、全体を通して子どもたちと触れ合って感じた感想としては、みんなに共通するものがあるということで、それは優しさだ。優しいからこそ、繊細であり、原因が何であれ、少しでもつまずくと、立ち上がるのが難しく、そのまま委縮して不登校になっていってしまうように感じた。このように繊細すぎるという観点だけに目が向かいがちだが、その子どもたちにも他にも長所はたくさんあり、現に沢山見つけられた。そのような長所という芽を摘むのではなく、もっと周りの人々がいいところを探してあげて、そのストロングポイントを生かしてあげる。このような相互の、いいところ探し。これをするのが不登校問題の解決の小さな一歩でもあるのかなと感じた。(史学科2年)

【今後の展望】

活動を通して、不登校の子どもたちにとってはけやき教室が自分の家以外で落ち着ける場所の一つであり、様々な人と関わることができる重要な場であることがわかった。また、学校に復帰するためにはまずはけやき教室に通えるようになることが第一歩であるように、とても大切な役割を担っていると感じた。しかし、指導員の先生方のお話にもあったように、けやき教室のような学校以外で学習ができる場に関する一般の認知度はまだ低い。そのため、今後は今までの活動を継続して行うとともに、けやき教室がどのような場所であるか、具体的にどのようなことを行っているかなどを、子ども達のプライバシーを考慮した上でより多くの人に知ってもらう方法を考え、実行していきたい。さらに、子どもたちと東京の大学に通う私たちとは住む環境が異なるため、お互いに交流することで新しい刺激を与え、興味を引き出すきっかけになれるよう取り組みたい。学校に通うことが難しくなってしまった子どもたちに、学校以外にも様々な選択肢を与え、自己選択できるような環境を築いていけたら良いと思う。

防災ディスカッション

【活動場所】

杉村惇美術館会議室(8月6日)

塩竈市役所壺番館視聴覚室(8月7日)

【活動期間】

第1陣

8/6(木):スマホディスカッション

8/7(金):防災ディスカッション

【参加人数】

青学生10名、中学生35名



防災ディスカッションを行ったメンバー

【活動背景・目的】

塩竈プロジェクトを開始してから3年間、中学生に対してサマースクールという形で学習支援を行ってきた。各中学校を訪れる中で、それぞれの中学校が震災以降、防災教育に熱心に取り組んでいる様子が見受けられた。また、塩竈市の「東日本大震災の反省と明らかになった課題」によると、危機回避能力を高める防災教育の充実性を掲げているとともに、児童・生徒の災害への自主的取り組みを推奨している。このように震災以後、子どもたちの防災による地域参加が重要視されるなかで、5年間災害ボランティアを行ってきた我々のノウハウや考えを次の世代に継承することが大事なのではないかと考えていた。地域の高齢化、共働き家庭の増加に伴い、日中に地域に残っている世代が子どもと高齢者となることが考えられる中で、とりわけ中学生が、再び災害が発生した時に自主的に災害ボランティア活動に従事することは地域の復興に欠かせないものである。今回のディスカッションでは緊急時に動ける地域の人材を育成するために、市内中学校生徒会で構成された「アルカス☆塩竈」のメンバーと共に「災害時に中学生になにができるか」という題目で議論し、地域防災への関心をさらに高めることを目的とする。また、こうした防災の知識を踏まえて真の復興を達成すべく、塩竈のリーダーを育成することをねらいとする。



左:スマホディスカッションにて青学生から意見



右:防災ディスカッションでのアイスブレイク

【活動内容】

活動は、6日に実施したスマホディスカッション、7日に実施した防災ディスカッションの内容の異なる2つに関して議論し、まとめ、発表した。スマホディスカッションは市教育委員会企画の“中学生のスマートフォン利用に関するルール作り”を行うもので、中学生と年齢が近い私たちだからこそ感じる意見を伝え、アドバイスしたり、グループ議論のファシリテートを担った。資料を用いて、スマホの利用と学力について考察し、スマホの使い方について各学校でルールを作成し、短冊に記入した。防災ディスカッションは市教育委員会のご協力の許、弊団体主導の企画としてディスカッション全体の運営を行った。内容としては、まずはじめに我々から「団体(ボランティア・ステーション)について、今回のディスカッションの目的、進行予定」を説明した。続いて、アイスブレイクとして9つの災害に備えるべきものが書かれたカードを用いて、その優先順をひし形にまとめるというものを行った。次に、「災害時に中学生になにができるか」という題目で、各自ポストイットに書き出し、KJ法(ポストイットにそれぞれ記載したものを、グループにまとめる方法)を用いてまとめ、各班で模造紙を作成してもらった。テーマはそれぞれ自由とし、「災害前、災害中、災害後」と時系列にまとめて作成する班や、「心のケア」というテーマに絞って、人々を笑顔にするという“ゆるキャラ”を作成した班もあった。そして最後に、この模造紙をもとに班毎に発表を行ってもらった。寸劇を用いて発表したり、クイズ形式で聴衆に訴えかけながら行ったりするなど、各班それぞれ工夫を凝らした発表が見受けられた。この発表で作成した模造紙は私たちが持ち帰らせていただき、責任を持ってまとめ、各中学校に報告書として配布予定である。そしてこの報告書をもとに生徒会のメンバーが校内生徒にも呼びかけを行い、学校全体の防災意識を高めることに繋げる。

防災ディスカッション

【スタッフの所感】

この防災ディスカッションは、弊団体企画の活動としては教育分野では初の試みである。たった2日間ではあるが、私たちとしても念入りに準備、協議を重ねてきた目玉の活動であった。今までの活動の多くが、学習支援など私たちからの一方的な支援であった。こうした活動もちろん重要ではあるが、より復興を目指すのであれば、子どもたちと一緒に考え、新しいものを創造していくことが重要であると、過去の活動を通して感じており、過去に活動に参加した学生からも同様の意見を頂戴していた。そして今回防災ディスカッション



発表模造紙作成中

という形で塩竈の防災について共に考える機会を持つことができた。実際の議論では震災の経験や、学校で防災教育に取り組んでいる成果からか、中学生から活発に意見が出た。私の班では、たくさんの意見が出たのだが、特に意見があがったものとして「心のケア」に関するものが多く見られた。具体的には、「高齢者や小さい子と話相手になる」、「避難所で歌を歌う」、「避難所新聞を作成する」などユニークな意見が出た。その中の1つに「笑顔でいる」という意見があった。これを書いた中学生に理由を尋ねたところ、「実際に東日本大震災の時に、避難所において笑顔でいることを心掛けていて、一番重要であると思う。」と答えてくれた。当時はまだ小学生だったのに、こうした状況に対して一番冷静な考えを持っていたのは大人よりも子どもなのではないかと、この言葉を聞いて強く思った。しかし別の班にも意見があったのだが、なかなか中学生だけではできないことには限界がある上、普段の生活だけではなかなかこうした防災のことをアウトプットする機会は少ないと考えられる。今回のディスカッションでは中学生のリアルな声を発信することができた上、改めて防災の重要性を考える良い機会となったと思う。



各班ごとに発表

【参加者の所感】

・今回初めての試みという防災ディスカッションに参加した。このディスカッションを通して、貴重な体験ができたり、新たな発見がたくさんあった。中でも私が最も驚いたのは、中学生の能力の高さである。やはり一度震災を経験しているからこそ、一人一人の防災に対する意識が高く、自分自身の意見をしっかり持っていたので、より活発な議論になったと思う。私は進行役として、中学生が委縮せず、言いたいことの言える環境作りが出来たと思うが、生徒たちからうまく意見を引き出せるような知識や経験が足りず、ファシリテーターの難しさを痛

感した。しかしこのディスカッションに参加できたことは私の考え方、価値観を変える大きな経験であり、これからの将来の財産になると思う。(地球社会共生学科1年)

・私は日頃、漠然と自分が大災害に遭うことはないと考えていた。また、「防災」というと「非常袋を用意する」、「家具を固定する」など「自分のための防災」ばかりをイメージしていた。しかし実際は、震災時1番役に立ったのは、日頃から近所の人々と挨拶をして仲よくしていたことだと話す中学生が多かった。災害時に中学生ができることを考えた際には、地域の人々を助ける行動を書いたポストイットが溢れた。その時私は、塩竈市の中学生の中に育てられていた、人のために何ができるのかという心に深く感動した。そして防災の根幹とは、地域にこそあるのだということに気づかされ、「周りの人をも巻き込んでいく防災」について更に考えていきたいと思った。

(経営学科3年)

【今後の展望】

今回のディスカッションは中学生を対象にした上に、今後更に発展的な災害ボランティアを行う上での足掛けに過ぎないと考えている。今後災害がもし起きた際には、考えているだけではなく、実際に行動に移さなければならない。このディスカッションを通して出た意見を実行できるようなイベントや活動を企画していきたいと考えている。また、ターゲットとして中学生は継続して行うのはもちろんのこと、小学生を対象とした防災に関するワークショップをできると考えている。数年後には世代を問わずに小学生から高齢者まで、塩竈の防災について議論できる機会を設けていきたい。

10年、20年後の塩竈が本当の意味で復興したと言えるように私たちは市民主導の復興の手助けをしていきたいと考えている。今年度の活動で見えた反省を活かし多くの世代に様々な観点からアプローチをしていきたいと思う。

農業支援

【活動場所】

浦戸諸島 寒風沢島

【活動期間】

第1陣:8月3日(月)～4日(火)

第2陣:8月13日(木)～14日(金)

【参加人数】

計2陣/18名



活動後、泥だらけに

【活動背景・目的】

寒風沢島には、NPO法人「浦戸アイランド倶楽部」が管理している田んぼがある。浦戸諸島は4島5地区から成るが、田んぼがあるのは現在、この寒風沢島のみである。震災時は堤防が決壊し、田んぼが海水に浸かってしまったため、塩害による被害を受けてしまった。また、人力で復旧するのは困難な場所であったため、県の大掛かりな工事によって、作付けできる状況に改善された。この田んぼは雨水のみを使用し、農薬をできるかぎり使わない。収穫したお米からは、島の名前からとった『寒風沢』という旨味と酸味が効いた日本酒が製造されており、塩竈市の地酒である『浦霞』とともに、「株式会社佐浦」より販売されている。『寒風沢』は『浦霞』と違い、数量限定で販売されている。その理由は、寒風沢島の田んぼ(※)は、一般的な田んぼに比べ作付け面積が35,000㎡と非常に狭いため、収穫できるお米も少ないからである。しかし、比較的面積が小さいと言えども、普段は3人で管理しており、夏期の手入れを必要としている。そこで、浦戸アイランド倶楽部の皆様の負担を軽減することを目的に、主に田んぼの手入れ(草刈)をさせていただいた。また、漁業支援と同様に、第一次産業に携わる機会の少ない私たちにとって、このような機会はとても貴重であり、活動を通じて知識の修得や考えを深めていく。

※注...塩竈市内の大部分は急勾配と住宅地、埋め立て地の為、市内で田んぼがあるのはここ寒風沢だけである。



左写真:

田んぼの草刈り



右写真:

トマトの枝を切る

【活動内容】

NPO団体「浦戸アイランド倶楽部」の、遠藤様と高山様のご指導のもと、寒風沢島の田んぼの草刈を行った。場所によって土のぬかるみが全く異なるため、スニーカーでも入れる程度の場所から、長靴でもすべて埋まってしまうほどの場所へと、順を追って行った。この田んぼでは農薬をあまり使わないため、すぐに雑草が生い茂ってしまい、稲の分まで土の養分を吸い取ってしまうと伺った。そのため、道路脇に生えているような短い雑草ではなく、稲よりも背の高いような雑草ばかりである。それらをすべて手で抜くことは厳しいため、鎌をお借りして、根元に近いところを刈った。

また、2陣では雨が降ってしまった日があったため、その日は田んぼの近くにあるビニールハウスの中で活動をさせていただいた。「浦戸アイランド倶楽部」の皆様が栽培しているトマトの、余分な枝を切る剪定作業と、ビニールハウス周辺の草刈をした。

農業支援

【スタッフの所感】

はじめは稲と雑草を見分けることも難しく、躊躇しながら刈っていたが、徐々に作業にも慣れ、途中からは黙々と作業を行った。しかし浦戸アイランド倶楽部の皆様は、「もっと話したり楽しみながらで良い」と気にかけて下さり、後半の作業では時に遊びながら、泥んこになりつつも楽しんで作業をした。また休憩の際には、冷たい飲み物とお菓子を差し入れて下さり、熱中症などの体調不良を訴える学生を1人も出すことなく、無事に活動を終えることが出来た。私たちをボランティアとして受け入れていただいたにもかかわらず、そのようなご配慮のうえで活動を行うことが出来た為、感謝の気持ちでいっぱいである。活動場所を去る際に、私たちが作業したこの田んぼでおいしいお米ができる、おいしい日本酒ができる、ということを想像すると、草刈といえども、稲の生長に関わることが出来たことに喜びを感じた。

都会育ちの私は、今まで農業に携わった経験がなかった。実際に草刈をしてみると、肌が弱いと草に負けて肌荒れしてしまったり、長時間下を向いたままの作業のため、熱中症や腰を痛めてしまう可能性があることに気付いた。とくに後者に関しては、高齢者の方にとってはかなり負担になりうるものである。浦戸アイランド倶楽部の皆様のような、農業に携わる生産年齢人口が増えなければ、島の農業は厳しいものになってしまうと感じた。ただでさえ炎天下での草刈を長時間続けることは難しく、遠藤様や高山様も、すべての雑草を3人で刈ることは難しいとおっしゃっていた。そのため、私たちが少しでも多くの雑草を刈ることで、浦戸アイランド倶楽部の皆様の作業負担を軽減したいという思いで活動した。また、東京の大学に通う私たちにとって、第一次産業に携わる機会は大変貴重であり、短期間でも携わることで農業の知識や現状など見知り得たものは大きいと感じている。



田んぼの草刈り



休憩中

【参加者の所感】

・普段都会に暮らす私にとって田んぼの草刈はあまりなじみがなかったため、大変な面もあったが、新鮮で楽しかった。しかし想像以上に労力が必要な作業であるということ、農業をやってみたいという興味本位の気持ちだけでは継続することが難しいと感じた。浦戸アイランド倶楽部の加藤さんは、震災以降、景観条例の影響で新たな建物を建てるのが難しく、島に暮らして常に作業をすることもできないとおっしゃっていた。また、人手が必要なため毎年ボランティアを募っているが、参加者は年々減少しているとのことだ。このお話を聞き、ボラ

ンティアが継続的に来ることが助けになるのであれば、来てもらえるよう私たちも宣伝等することが大切だと感じた。そのため、今回寒風沢島で活動した私が、周りの人たちやSNSを通じて広めようと思った。興味だけで継続することは難しいかもしれないが、まずは寒風沢島や農業に興味・関心を持ってもらい、現地に来てもらうことがこの島を活性化させることに繋がると考えた。また私自身も、ボランティアだけでなく観光としても、また寒風沢島を訪れたいと思った。(英米文学科 3年)

【今後の展望】

今回、塩竈プロジェクトとして初めて農業支援を取り入れた。その理由として浦戸アイランド倶楽部さんよりニーズをいただいたこと、大学生が第一次産業について考える機会を作ることが挙げられる。しかし正直、今回は“農業体験”という形で終わってしまったと感じている。浦戸アイランド倶楽部の皆様は「楽しかった、また来たいと思ってもらえたら嬉しい。」と言って下さった。その点では、ニーズに答えることができたと言えるのかもしれない。皆が本当に楽しく作業をすることができ、帰るときには名残惜しく、「また明日も来て活動したい。」と話す参加者もいた。しかし、私達がボランティアとして訪れる以上、体験して「楽しかった」、「新たな知識が身についた」で終わってしまったのはならないと思う。私達はボランティアをすることによって、貴重なものを得られると常に感じている。それは、訪れなければ味わうことのできない現地の空気、お会いしなければ触れることのできない現地の方々の思いである。そしてそれは、年数を重ねるごとに、よりよい活動にしていきたいという思いの源になっている。

私たちには、まず何よりも第一に「塩竈市の復興に貢献したい」という気持ちがある。そのため、ぜひ来年以降もこの活動を継続し、よりよいものにしていきたいと思うと同時に、訪れたからこそ感じた寒風沢島の魅力や、私たちを温かく迎え入れてくださった浦戸アイランド倶楽部さんの活動とその魅力を、多くの人々に発信していきたいと思う。

漁業支援

【活動場所】

浦戸諸島 桂島

【活動期間】

第1陣:8月3日(月)～8月5日(水)

第2陣:8月12日(水)～14日(金)

第3陣:8月17日(月)

【参加人数】

計3陣/37名



作業中の様子

【活動背景・目的】

震災前、漁業は塩竈市の主要産業の一つであった。カキやホヤを代表とし、マグロやカツオ、海藻類など幅広く取り扱っていた。それは今でも変わらないが、震災をきっかけに販路が途絶えてしまったことや、担い手の不足が問題となっている。ホヤに関しては、ウエイトの大半を占めていた韓国への輸出が途絶えてしまったことで、売り上げが激減してしまった。とくに浦戸諸島では漁業や養殖業を生業としての方が大半であるが、高齢化が進んでおり、若い漁師さんは少ない。震災をきっかけに、島を離れ本土に移した方や、採算が取れず生計を立てることが厳しくなり、漁師を辞めてしまった方も多し。それでも、塩竈の漁業を再興させるために、これまで個別に行っていたことも、1つの漁業組合として力をあわせるようになった。夏は漁師さんたちにとって繁忙期に向けた準備期間にあたるが、仕事の量は膨大である。そのため、私たち学生にもできる仕事をお手伝いすることで、漁師さんたちの負担を軽減することを目的とする。また、大学生が第一次産業に触れ、考えを深める機会とする。



左: 縄を10メートルに測り切る様子



右: 切った縄を腕に巻き付ける様子

【活動内容】

漁業組合の後藤様のご指導のもと、桂島フェリー乗り場の近くにある作業場で、ホヤの卵を付着させるための道具“採苗器”作製のお手伝いをした。この活動は、2013年度から続けて行っている。作業内容は、「しゅろ」という植物からできた細い縄を10メートルにカットし、手と肘に巻き付けて直径30センチメートルほどの輪を作るというものである。4～5人で、縄を測ってカットする人、輪を作る人、最後に縄の2か所を針金で留める人、と役割を分担して行った。

1陣では、10メートルにカットするところを誤って9メートルにカットしてしまったものがあった。そのため2陣では、足りない1メートルをつぎ足す作業を行った。3陣では、カキの種を付着させる、ホタテ貝の洗浄作業を行った。

漁業支援

【スタッフの所感】

はじめは「ホヤの養殖作業のお手伝い」と聞いていたため、海に出ることや、ホヤそのものを扱うなどの作業をイメージしていた。しかし漁業においては、海に出ている時間よりも、準備作業・撤収作業の期間の方が圧倒的に長いようだ。このような地道な作業がある上で、養殖作業をすることが出来、おいしいホヤができるのである。その中でも採苗器は、12月～1月頃の産卵期までに大量に作っておかなくてはならない。しかし普段は、組合員の方が1～3人で作っているようだ。そこで、私たち計9人が3日間お手伝いさせていただいたことは、微力ながら漁業組合の方々の負担を軽減できたのではないかと感じた。作業を始めた頃は、軍手をつけたまま縄を切ったり結んだりすることさえもぎこちなく、個人で作業のスピードに差が生じてしまっていた。しかし、慣れてゆくにつれ、自然と役割を分担し、皆で効率的に作業を進めることができるようになった。ただ、一部作業に手違いが生じ、本来であれば1週間で終わられるはずの内容が2週間に及んでしまったため、もっとお手伝いできたのではないかととても心残りである。来年はもっとスムーズに、より多くのお仕事をお手伝いしたいと思う。

作業前には、後藤さんが、「採苗器がどのようにしてホヤの養殖に使われるのか」、「ホヤはどのようにして成長してゆくのか」といったことを写真とともに詳しく説明してくださった。そのため、何を注意して作るべきか、意識しながら作製することができた。また、作業中には、ホヤの養殖における厳しさや、震災後の浦戸諸島の漁業・養殖業事情についてもたくさんお話ししてくださり、より知識を深めることができた。



作った輪を針金で留める様子



桂島に向かう渡船にて

【参加者の所感】

・作業の途中、後藤さんが震災時の話をたくさんしてくださった。津波の影響で、漁業に携わる方たちが本土の息子たちの家へと移り、人手不足になってしまったことや、残った人たちが漁業組合を作って、協力して作業をするようになったことを伺った。後藤さんはいつも私たちが気遣い、こまめな休憩を促してくださった。また、昼休憩には海を見て来なさいと言ってくださったり、いつでも私たちが楽しいように振る舞ってくださった。実際に海岸に行ってみると、たくさんの若者、親子連れで大いに賑わっていた。作業中にも、多くの人がフェリー乗り場から

海水浴場に歩いていくところを見たが、その数は想像以上であった。多くの人が足を運んで桂島に来ていたことは、自分のことのように嬉しく感じた。

活動終了後には、桂島で漁業に携わる理由をお尋ねした。後藤さんは元々役所に勤めており、水産試験場に配属されて初めての現場が桂島であったようだ。その当時色々アドバイスをくれた桂島の人々の将来のために、次は逆に後藤さんが教える立場として、次の世代に繋いで行きたいとお答えいただいた。そして、今まで研究、実験してきた成果が実り、今年から他の生産者の方達と後藤さんが改良したカキの生産を行うそうだ。私も一作業をお手伝いさせていただいた身として、美味しい牡蠣ができることを心から願っている。(地球社会共生学科 1年)

【今後の展望】

今回後藤さんから、ホヤの養殖や、塩竈市の漁業に関する話をたくさん聞かせていただいた。さらに、参加者からの質問にもお答えいただき、その様子を撮った動画を広報活動に利用する許可をいただいた。私たちが実際に島を訪れ、作業をお手伝いすることも大切である。しかし、そもそも浦戸諸島を知らない人々、カキやホヤの名産地であることを知らない人々に向けて、漁業に携わっている方の貴重なお話を、広報活動により伝えていくことも重要であると感じた。そのため、今後の同窓祭や学園祭などの機会を利用し、その動画を多くの人々に観てもらい、浦戸諸島に興味を持ってもらうきっかけを作りたいと思う。

一言でホヤの養殖と言っても、1年を通して様々な作業がある。夏期塩竈プロジェクトの活動時期に関して、私たちが採苗器作り以外にお手伝いできることはないのかもしれない。そして学生という本分を弁えたと活動期間にも限界があるため、その作業量は少ないかもしれない。しかし、短期間でも、多くの作業のうちのほんの一作業でも、1日も早い漁業の再興に貢献したいという思いを持ち、今後も活動を継続して行いたいと強く感じた。

花火大会・ライブ

【活動場所】

浦戸諸島(桂島、石浜、野々島)

【活動期間】

第1陣

8月4日(火): 鈴木友里絵さんライブ

第2陣

8月13日(木): 桂島花火大会

8月14日(金): 野々島花火大会

【参加人数】

のべ32名



桂島花火大会にて

【活動背景・目的】

浦戸諸島では東日本大震災発生以前より、若者を中心とした島外への人口流出とそれによる高齢化・過疎化が進み問題となっていた。震災以降は 本土に移り住む島民が更に増え、島民のほとんどが高齢者となっている。そのような中で、夏のお盆の時期に開催される桂島、野々島での花火大会にも震災以降本土からの観光客が減ってしまった。またお祭りの準備の手伝いに参加することで、普段若者と触れ合う機会の少ない島民の方とお話をし、盆踊りに参加して一緒に踊ることでお祭りを盛り上げることを目指している。本年度は更に、私たち大学生が事前にチラシを作成して本土の方々への広報活動を行い、観光客増加に貢献する。

また、これまで活動以外に島の方々とイベントを通して交流をすることがあまりなかったという経緯がある。今回、参加者のなかでシンガーソングライターの鈴木友里絵さん(経営学科 4年)が参加してくれたことから、今まで行ってきたことのない支援の形を実現しようとライブを企画した。



左: 桂島花火大会の準備



右: 鈴木友里絵さんのライブ

【活動内容】

＜桂島花火大会＞

午前中から、お祭りに使用する机やイスなどを小学校の体育館から運び出す作業、テントの設営、提灯を取り付ける作業のお手伝いをした。お手伝いをしながら島民の皆様とお話をする機会が多くあり、その中からこの花火大会をどれほど楽しみにしているのかが伝わってきた。さらに、花火大会当日のプログラム表、お祭り内で行うビンゴ大会の表の作製を行った。お手伝い自体は午前中に終了し、夕方になり実際にお祭りが始まってからは、全員で積極的に盆踊りに参加してお祭りを島民の皆様や本土からの観光客と一丸になって盛り上げた。※花火は雨天により15日に順延。

＜野々島花火大会＞

前日の桂島花火大会と同様に、午前中は主に屋台の組み立て、テント、観覧席の設営、ベンチの洗浄、提灯を拭いて取り付ける作業のお手伝いをした。野々島のお祭りの準備も桂島と同様に多くの島民の皆様とコミュニケーションを図りながら作業をすることが出来た。さらに午後にはお祭りの販売品に関するポップ作りや、実際にお祭りで販売する水風船を製作する作業のお手伝いをした。お祭りが始まってからも前日の桂島同様に、盆踊りに全員で参加し、慣れないながらも楽しみつづ、盆踊りの輪に加わる等お祭りを盛り上げた。

＜ライブ＞

ブルーセンター(宿泊所)の体育館でライブを実施した後、島民の皆様と1陣の青学生とで交流会を行った。

花火大会・ライブ

【スタッフの所感】

＜桂島・野々島花火大会＞

今年は天候に恵まれず、残念ながら桂島の花火打ち上げは延期となってしまう、私は見るができなかったが、野々島花火大会ではきれいな花火が夜の浦戸に上がった。島民の皆様が花火師の資格を取り、近くの堤防から上げる花火は都会では感じる事が出来ない迫力があつた。活動期間中は野々島に宿泊しているが、実際に島の皆様とお話できる機会は多くない。今回のお祭りを通して、島の皆様と交流できたことは嬉しかった。そして何より島の皆様の団結力、地域の絆を感じた花火大会であつた。一方、雨天のなか行われた桂島花火大会だが、フェリーの臨時便が出るほど本土から多くの人たちが訪れているのを見て、少しずつではあるが花火大会に活気が戻りつつあることを感じた。しかし震災以前の賑わいに戻るためにはさらに努力が必要だ。より多くの人に訪れてもらえるように広報活動に力を入れ、これからも花火大会の開催、周知に携わっていききたい。

＜ライブ＞

これまで野々島を宿泊の拠点とし、浦戸でも様々な活動を行ってきたが、そこには対人的な要素がほとんどなく、どこか物足りない感じを覚えていた。そこで今回機会にも恵まれ、野々島民の皆様を招待しての本学歌手鈴木さんのライブ、交流会を実施する運びとなった。これまでとは違った形での支援を実現できていれば幸いに思う。また、今後も市民の皆様と直接コミュニケーションの取れる機会を是非つくっていききたいと強く感じる。



野々島花火大会で盆踊り



ライブ後の交流会

【参加者の所感】

・桂島花火大会では浦戸諸島の方々、塩竈の方々が「協力し、つくりあげ、楽しむ」という点において塩竈全体の一体感を強く感じた。都心で開催されるお祭りでは、準備や後片付けは業者に委ね、ただ楽しむだけであり、このような一体感を感じる事はできなかった。当日の準備と後片付けに参加させて頂いたことで、「お祭りは準備・後片付けのプロセスを通じて生まれる一体感が大切である」ということを学んだ。(教育学科3年)

・私が塩竈プロジェクトに参加した理由は、ボランティアがしたいという事ともう一つ、シンガーソングライターとして、本当に人の心に届く歌を作りたいからである。被災地の方々が何を思って、どんな辛いことがあって、どんな傷を持っているのか、自分できちんと感じて、少しでもその人達を笑顔にできるようにしたいと思い、このプロジェクトに参加した。しかし、現地へ行き感じた事は何よりも、塩竈の方々の強さとあたたかさである。辛いことも、悲しいことも沢山あったはずなのに、笑顔で優しく包み込んでくれる、誰かを笑顔にしてくれる温かさがそこにはあった。人は一人じゃないんだということを教えてくれた。ボラスターの皆さんが塩竈でのライブを企画し、実行してくれた際、市の方々が涙を流しながら歌を聴いてくれた事がとても嬉しかった。また、一曲塩竈で作った曲を歌った。その曲は、自然を大切に、強く明るく生きる塩竈の方々が、ずっと笑顔でいられるようにという想いを込めて書いたものである。笑顔を届けたいと行った塩竈だけれど、逆に私の方が沢山笑顔をもたらしてしまった。きっとそれは、このプロジェクトに参加した学生皆も同じである。こんな素敵な人達がいる、この塩竈の事を、もっと沢山のの人に知ってもらいたいと感じた。ライブの帰り際に、「有名になってね。頑張るんだよ」と現地の方々がハグしてくれた時には、思わず涙がこぼれた。このプロジェクトに参加することができ、本当に良かった。また絶対もっと有名になって、塩竈の皆さんに喜んでもらえるよう、頑張ります！（経営学科4年）

【今後の展望】

花火大会のお手伝いを通して一番に人手不足を痛感した。花火大会は年々観光客は増加傾向にあるが、それでもまだ来島者は少ないと感じた。今回は私たちが花火大会のチラシを作製し、SNSを使って呼びかけたが、さらに来年以降どのような方法でより多くの観光客を呼び込むかを話し合った。具体的に「花火大会を塩竈のツアーとして盛り込む」や「ナイトクルーズから花火を見る」など多くの意見が挙がった。こうした案を参考にし、来年は今年以上の観光客を呼び込んでお祭りを盛り上げることに貢献していきたい。

ライブは今回たまたま参加者の中に歌手活動をしている方がおり実施することができたが、今後もイベント等を通して島の皆様との絆を深められるような活動を実施していきたいと考えている。

PR動画

【活動場所】

塩竈市内

【活動期間】

第2陣

8月10日(月)、11日(火)

【参加人数】

3名

【本プロジェクト作製塩竈市旅行促進ツール】

・WEBマップ: <http://ctplanner.jp/ctp5/>

・2014年PR動画: <https://www.youtube.com/watch?v=Hk8349tNmcA>

・2015年PR動画: <https://www.youtube.com/watch?v=-fcNYdYe518>



動画を撮影中

【活動背景・目的】

塩竈市は、古くから多賀城の外港、そして港町として栄えてきた。世界三大漁場のひとつであり、暖流と寒流がぶつかり合う塩竈沖では1年を通して極めて豊富な種類の海産物が漁れる。そのため塩竈市では新鮮で美味しい海産物を安く手に入れることができる。そんな塩竈は、寿司屋の店舗数も多い。実に塩竈市の寿司屋さんの件数は40件にもものぼり、人口当たりの寿司屋の店舗数は全国一である。そんな寿司屋が犇めき合う塩竈では、一軒一軒どのお店も個性的でそれぞれの魅力があり、自慢の寿司を握る。

私たちはこの全国に誇れる港町としての塩竈を、若者の視点から“動画”という媒体によって多くの人に伝えたいと考えた。復興も着々と進んできており、町は震災前の賑わいに戻りつつある。しかしながら、震災による影響は現在も続いている。2014年の塩釜市魚市場の水揚げ高は、約84億円に留まり、「塩竈市第5次長期総合計画」(2010年)に目標として掲げられている100億円には遠く及ばない。また、気仙沼、石巻、女川を含めた県内主要4漁港の最下位に落ち込んだ。マリゲートの入場者数や遊覧船の乗船人数もピーク時には遠く及ばない。

そこで今回は塩竈の水産業に重点を置いて動画を作製することにした。取材したのは今年50周年を迎える塩釜水産物仲卸市場や、市内のお寿司屋さんである。特に塩竈の魚を提供する側の「生の声」を直接視聴者の方へ届けることを重視して取材を行った。

また新たな試みとして、市民の方々の視点からも塩竈の良さをPRしたいと考え、塩竈市民の皆様にも「塩竈のよさ」についてインタビューし、動画に盛り込んだ。塩竈市の生の声が詰まった動画で、ディープな魅力を伝え発信し、塩竈の復興を勢いづけたいと考え、活動を行った。



左: 握りたての新鮮なお寿司とすし麻呂(マスコット)



右: 親方の“熟練技”

【活動内容】

PR動画の作製は動画全体の編成や主旨を決めるところから始まった。まずは何を取材するかなどの取材計画を練り、その後「どうすれば塩竈の良さが伝わるか」を第一に、撮影方法やインタビュー内容等の取材の詳細について時間をかけて話合った。そして今年も、塩竈市の公認キャラクター「すし麻呂」を使って動画を作製することにした。詳細が決まった後、市役所の職員さんや市場の連合会の方、お寿司屋さんの連合会を始めとした市民の皆様のご協力を得て、取材させて頂くお店とアポイントメントを取った。そして現地では2日間に渡って7件のお店のほか、多くの市民の皆様にご協力頂き取材を行った。

取材にご協力頂いたのは塩釜水産物仲卸市場内の「丸邦佐藤商店」・「百々商店」・「宮内商店」と、塩竈市内にあるお寿司屋さんの「亀喜寿司」・「鮎しらはた」・「すしやの山孝」、そして市民から愛されている町のお魚屋さん「松野鮮魚店」である。1軒あたり15～30分程度で取材を行った。活動中はより良いものを作製するため、自分たちで考えてきた質問だけでなく、限られた時間の中で塩竈やお店の良さを引き出すため、臨機応変に質問を変えながら取材を行った。また、1軒1軒取材した後に反省点を挙げ、それらを改善しながら次の取材に臨んだ。

PR動画

【スタッフの所感】

私は昨年度もWEBマップやPR動画の作製に携わり、塩竈市内の多くのお店を取材し、動画を編集させていただいた。その中で感じたのは、「塩竈の方々の温かさ」である。今回は、昨年の取材ではできなかった塩竈市民の皆様へのインタビューを行い、塩竈の良さについてお聞きした。その中でも多くの方がおっしゃっていたのもまた、「人の温かさ」であった。私が塩竈を初めて訪れてからまだ1年ほどしか経っていないが、故郷のように感じてしまうほど、私にとって居心地が良く、大好きな場所となっている。取材させて頂いたお店は、どのお店も盆前の繁忙期でお忙しいのにも関わらず、私たちを笑顔で迎えて下さり、丁寧に取材に応じて下さった。また、昨年取材したお店の方にも塩竈市民の声ということで取材をお願いしたのだが、私のことを覚えていて下さったことは大きな喜びであった。



すし麻呂がインタビュー

今回私たちは「動画」という媒体で塩竈の魅力を発信する活動を行った。私はこの媒体の長所は「その場に行かなくとも現地の様子を知り、感じることができる」ということであると思う。塩竈の魅力を知ってもらうには実際に来るに越したことはない。しかし、動画は塩竈の新鮮な海産物、綺麗な景色、そして何より市民の皆様の表情や声を取材した私たちとほとんど変わりなく、直接視聴者の方々へ届けることができる。また、その動画の取材や編集をプロではなく、動画に関して素人の大学生である私たちが行うことの意味は、仕事として現地に赴き取材を行うだけでなく、短期間ではあるが実際に塩竈で生活し、市民の皆様とコミュニケーションを取りながら活動を行うことで、より深い塩竈の魅力を伝えられることにあると私は考える。今後も、私たちだからこそ発信できる塩竈の良さを伝えることで、復興に携わることができればと思う。



親方にインタビュー

【参加者の所感】

・PR活動では、寿司屋を中心にまわってインタビューをしたが、そこから塩竈の人々は人情深いことや、塩竈には日本有数の港があること、交通の便が良く住みやすいこと、鹽竈神社を中心とした暮らしをしていること、古い歴史のある町であることなどの塩竈の良さや誇るべきところについて知ることができ、良かった。

また、活動を通して地域貢献とは何か、と考える場面が何度かあった。「どのようなことを伝えれば、多くの人が塩竈を訪れたいと思うか」を考えて地域の人に話を聞くことを心がけた。

ボランティアとして動画を作製して、発信していく際、ただの町紹介をするのではなく、塩竈の地域復興を目的としていくことに重点を置いて動画を作製できればと思う。

今後もボランティア・ステーションには一地域を振興させるためのPR活動などを行ってほしい。またボランティアは人のために何かをすること、例えば物資を送ったり、作業の手伝いをしたりなどの具体的な行動を想定することが多い気がするが、定期的にその人に会いに行き、言葉を交わすこと自体もボランティアにつながるのではないかと強く感じ、ボランティアに対するイメージが変化した。

今回PR活動というグループに参加でき、とても良かった。自分の中で普段は考えつかないような疑問や課題を見出すことができた。本当に参加して良かった。今後の自分の糧としてこの経験を活かしていきたい。

【今後の展望】

今年(2015年)の5月に仙石線の全線再開及び仙石東北ライン新設、塩釜水産物仲卸市場が50周年を迎え、盛り上がりを迎える塩竈市。この絶好の機会を生かすべく、昨年度に完成したWEBマップや街歩きアプリと合わせ、PR動画のURLを弊団体で作製したHP・塩竈市HPへ掲載することで、市内外に広く発信していく。さらに、これらが多くの人の目に留まるような方法を考えていく。来年度は浦戸の自然などにも目を向けていきたい。

また、今後も学生独自の視点から作製するという点に重点を置きながら、塩竈市が掲げる「おいしさ笑顔がつどう みなとまち 塩竈」そして、まちづくりの目標としている「海・港と歴史を活かすまち」としての塩竈を市民の皆様と一緒にPRしていきたい。そのため、来年度以降は、より一層市民の皆様の声を活動に反映させていきたいと考えている。そうすることで、計画で指標としてあげられている観光客入込数、塩竈みなと祭の入込客数などの増加を実現させるための力になりたい。

震災から4年が経過し、塩竈市だけでなく、東北各地で復興へ向け様々な取り組みがなされている。東北の地域全体で刺激し合い、協力して復興していく姿に今後も注目していきたい。そして私たちも、広報活動を通して塩竈・東北の復興に積極的に携わって行きたい。

陸前高田プロジェクト



陸前高田プロジェクトリーダー
経営学科2年
田中 守

409km。

陸前高田市役所から青山キャンパスまでの直線距離だそうです。

足繁く通うには少し距離のあるように思える岩手県陸前高田市で、私たちがプロジェクトを行っている
と人に伝える度に「東北出身なのですか？」と聞かれます。 自分は東北出身でも、東日本大震災で被災し
た知人がいたわけでもありません。

私が陸前高田市の沿岸部を訪れた2014年7月は、嵩(かさ)上げ工事が本格化する直前で、平たく広がっ
た土地がある状態でした。 メディアで知ったつもりになっていた今の東北とはあまりにも離れた景色に感
じた虚無感を今も覚えています。

ここで東京の学生に、どのようなことができるのだろうかと深く悩みながらも、現地の方のための復興
支援をしなければならない、思い返すと1年生の頃はそのような気持ちが先走っていました。
ですが、現地に足を運ぶ回数が重なっていくごとに「支援」というのは学生には少し荷が重く、どこか現
地の人たちにおこがましさをさえる言葉に思うようになりました。1年生の頃の私のように悩んでいるス
タッフには「縁の始まり程度に思いつめないで考えていいよ」と冗談交じりに伝えています。

学生団体の弱い点は、進級に伴ってメンバーが頻繁に入れ替わる学生から学生への引き継ぎの難しさ
にあると思っています。陸前高田で出会った人たちの暖かさや地域の魅力を言い表すことができなかったの
ですが、岡林真琴は汲み取ってくれたので引き継ぐことにしました。

最後になってしまいましたが、2012年から2015年までの4年間、陸前高田プロジェクトに携わって下
さった皆様、多くの迷惑をかけながらではありましたが、今年も無事にプロジェクトを終えることができ
ました。

来年度に向けて既に新たな体制で動き始めている陸前高田プロジェクトを今後ともよろしくお願い致し
ます。

* 本プロジェクトは、公益財団法人大和証券福祉財団からの「災害ボランティア活動助成」による
ご支援を頂きました。

陸前高田プロジェクト



2016年度陸前高田プロジェクトリーダー 国際コミュニケーション学科1年 岡林 真琴

みなさんはボランティアという言葉聞いて何を思い浮かべるでしょうか。私は高校生の時からボランティアとして東北に行きたいと思いつつも、たかが高校生である自分には何もすることができない、とボランティアに対して、どこか高いハードルを感じていました。

大学に入り、ボランティア・ステーションと出会い、東北や東日本大震災と真剣に向き合うようになりました。そして、2015年の5月に岩手県陸前高田市を訪れました。かさ上げ工事作業の大きな音が響き渡っていた陸前高田市。震災から4年と2ヶ月が経過し、メディアが震災について取り上げる回数は圧倒的に少なくなり、首都圏で生活をしている人にとって、東日本大震災は遠い記憶となりつつあるように思えます。

しかし、私の目の前にはメディアを通してでは決して伝わることのない復興への道のりの険しさが広がっていました。初めて陸前高田を訪れ、より素敵な街にしていこうとたくさんの方が行動しているということを知り、私に何もできないと勝手に考えていたことが恥ずかしくなりました。私が陸前高田を訪れた数は5月と8月のまだ2回で、少な過ぎると自分でも感じているため、東京にいる時は出来るだけ陸前高田や東北に関する講演会等に参加するようにしています。

陸前高田について知っていることが増える度、現地に知り合いが増える度に、陸前高田のことが、ますます好きになっています。これからはリーダーとして活動をしていくため、今まで以上に、悩むことは増えていくと思いますが、その度に、東北が好き、陸前高田が好き、というこの初心を大切にしていこうと思います。また、先輩方の陸前高田への熱い思いと共に行動していこうと思います。

震災から間もなく5年。東北を取り巻く環境は変わりつつありますが、このプロジェクトに今まで関わってくださった方、これから関わってくださる方への感謝を忘れずに、一人一人と向き合った暖かいプロジェクトにしていきたいと思っています。

スタディツアー

【活動場所】 岩手県陸前高田市内

【活動期間】 2015年8月2日、9日

【参加人数】 14人



(田村氏の講演会)

【活動背景・目的】

震災から4年半が経ち、東北では目に見える形での復興が進んでおり、場所によっては一見すると復興は終わったと思える場所もある。陸前高田市は現在もかさ上げ工事を行っている段階で、この街は復旧をしている段階にあるのだということを参加者に認識してもらうためにスタディツアーを行う。

また、首都圏のメディアでは、報道が減っていることもあり、「何故自分たちが、いま陸前高田市でボランティアをするのか」ということを改めて自分の目で見て考えてから、教育・地域・福祉支援活動に取り組んでもらえるようにする狙いがある。



左：道の駅“TAPIC45”にて
当時の状況を伺った

右：陸前高田復興まちづくり情報
館にて、今後のまちづくりにつ
いてのお話を伺った



【活動内容】

今年も本学OBで、高田ドライビングスクールの社長である田村満氏より、東日本大震災直後から2011年の動き、また、これからのまちづくりについてのお話を伺った。人と自然は共存して社会が成り立つべきだという田村氏の考え方を基に話して下さった。

2時間に及ぶ講演の後は田村氏にマイクロバスを運転していただき、実際に陸前高田市内を観て、その場所その場所で話を頂いた。

午前中は奇跡の一本松とTAPIC45を見てから、慰霊碑で献花をし、陸前高田復興まちづくり情報館では防潮堤の高さのお話を伺った。

午後は箱根山を訪れ、高田松原の再生のための挿し木を見た。また、箱根山から陸前高田市内を一望し当時の津波による浸水等の話を教えて頂いた。

田村氏と別れ宿に戻った後は、スタディツアーで考えたことを互いに話し合った。それぞれが違った風にその日見たもののことを捉えていたように思える。また、持参したLIGHT UP NIPPONのDVDを鑑賞したり、知っている支援の取り組みを互いに共有することで、できるだけ多面的にとらえられるように努めた。

スタディツアー

【スタッフの所感】

私が初めて陸前高田市を訪れたのは今年の5月だったがその時から比べ、この3ヶ月でかさ上げの工事は驚くほどのスピードで進んでおり、ハード面での「復旧」が進んでいる印象を受けた。

しかし、復旧作業が進む一方で震災から4年半が経ち人々から震災の記憶が薄れつつあるということを東京で思うことが多々ある。

スタディツアーを行ったことで、現地の方々の気持ちを考える機会を参加者だけでなく、スタッフの私たちも改めて作ることができ、次の日からの活動をより有意義なものできたと思う。

また個人的には、ツアーに参加したことで私は「復旧」と「復興」の違いを改めて感じた。陸前高田市では復旧は進んでいるがまだまだ心のケアを含めた復興は進んでいない。私たちはこれからも教育支援や地域支援、福祉支援を通じて陸前高田市のこれからに携わっていきたい。



(奇跡の一本松)



(TAPIC45内部、震災後のまま残っている)

【参加者の所感】

高田ドライビングスクールの田村社長の講演では、陸前高田の震災による被害状況と今度の復興に関するお話を聞かせていただいた。

田村社長は東日本大震災という緊急の事態に際して、何が一番大切なのかを考え、問題と真摯に向き合うことの重要性について教えてくださったため、震災の復興を考える上での新たな視点を獲得することができた。

また、震災遺構のTAPIC45からは陸前高田を襲った津波の破壊力の大きさを改めて実感した。目の当たりにした現状を私は、伝える義務があると感じたし、どのような手段で発信すべきかについても自分自身で考えなくてはならないと思う。

さらに、津波の被害にあいながらも、現在も保存されている一本松を見るのは今日が初めてであったが、この松が復興の象徴であり、陸前高田に住む人の心の支えになっているのだと改めて感じた。このような、震災に関するものをどうやって後世に残すのか、保存しておくのかも、津波の教訓を伝えることや、人々の心の支えといった面において重要なのだと感じた。

【今後の展望】

復興集中期間が今年で終わり、来年以降は東日本大震災についての報道がますます減り、震災が風化してしまうことが予想される。このような中、何も勉強せずに陸前高田市でボランティア活動をするのは、なぜなのか自分たちで答えを見つけるのは難しいと考えられる。東京の学生が東日本大震災に向き合い、様々なボランティア活動を意義のある活動として行うために必要だと考えている。

そのため陸前高田プロジェクトでは、これからもスタディツアーを企画し、実行していく。

教育支援

【活動場所】陸前高田市立気仙中学校

【活動期間】8月3日(火)～6日(金)

【参加人数】7名



(自習の時間に勉強を教える様子)

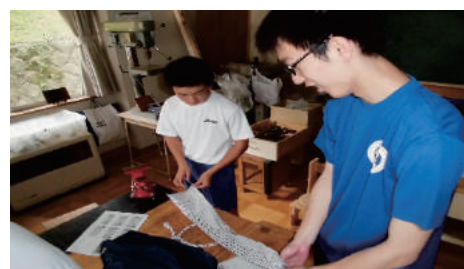
【活動背景・目的】

気仙中学校は震災以前、沿岸部に位置していたが津波の被害を受け、現在は内陸部にある旧矢作中学校校舎で学校生活を送っている。陸前高田市内の他の中学校と同様に気仙中学校も大学生によるボランティアを必要としていたが、交通の便が悪いこともあり実現していなかった。陸前高田プロジェクトでは2012年から現在の気仙中学校付近にある愛宕下仮設住宅集会所において学習支援を行っており、その様子を見た気仙中学校の校長先生から昨夏に依頼を受け今回の活動を実施するに至った。

気仙中学校の生徒は夏休みも学校に来て自習や部活動に取り組んでいる。そこで自習の時間に大学生が補助に入り、学習塾に通うことが難しい生徒たちに勉強のやり方や受験のノウハウを提供することで学力の向上を目指す。また、大学や高校での学生生活などを話し、中学生の視点を外部に向けることで自らの進路について考える契機となるようにする。



左:教室で勉強を教える様子



右:鉢巻製作の様子

【活動内容】

中学3年生のクラスに入り、学校の時間割に沿って活動を行った。1時間目は自習の補助を行った。高校受験を半年後に控えていることもあり、集中して勉強に取り組んでいた。1クラスの人数は都市部の学校に比べて多くないが、それでも1人の先生が教室全体をカバーすることは難しく大学生が補助に入る必要性を感じた。生徒の多くは夏休みの課題に取り組んでいたが、ただ答えを教えるだけでなくそこに至るまでの過程や考え方まで伝えることを心掛けた。また、勉強が苦手な生徒に対してはマンツーマンで対応を行い学力の向上に努めた。

2時間目は地元のお祭り「けんか七夕」に向けた太鼓練習を見学した。「普段関わりのない人たちに見てもらおうと生徒たちも喜ぶ。」という声を頂き、見学ではあるが、こうした活動を行うに至った。本番まであまり時間がないということもあり真剣に練習する生徒たちが強く印象に残っている。また、お祭りで使用する鉢巻の作成も手伝い生徒たちと交流を図る機会となった。

3時間目は校舎の近くを流れる川で生徒たちと遊んだ。これは真夏の体育館で太鼓練習をした後、体を冷やすのと同時に地元陸前高田の自然と共同するという意味合いがある時間である。孤立してしまう生徒がいないように工夫し、多くの生徒と交流し翌日以降の活動へと活かした。

他にも全校行事として開催されたウォーキング教室では大学生が各学年に分かれて補助に入った。1・2年生とはなかなか関わる機会がなかったため貴重な時間であった。

いずれの活動も普段関わることの少ない大学生との交流を通してよい刺激が与えられたと感じている。

教育支援

【スタッフの所感】

私は1年生であるため、スタッフという立場にありながら、学校に入って行うボランティア活動は初めてであった。強く印象に残ったことは勉強を教えることの難しさと生徒の活発さ、そして素直さである。

自分が答えを分かっているにも関わらず、考え方を示すことができず、本質的な理解へ繋げることができない場面が多くあった。勉強を教えるにあたっての準備不足が原因であり来年度以降へ向けての課題としたい。



(川遊びの様子)

生徒たちは受験生でありながらも学校行事などにも全力で取り組んでおり、自分が中学生であった頃と比べて素直でマジメであると感心させられた。

太鼓の練習は日を重ねるごとに完成度が増していく様子が素人目にも見て取ることができ、中学生が互いに意見を交わしながら向上させていく姿から、私たち大学生にも学ぶものがあるのではないかと思った。

本番の演奏を見られないことがとても残念に思えるほどにすばらしいものであった。

今回私たちがボランティアに入ったことで生徒が少しでも何かを得て、今後の人生に活かしてくれるようなことがあれば幸いである。



(掃除の手伝い)

【参加者の所感】

午前中の気仙中学校の教育支援では、生徒たちの勉強を手伝うことはもちろんだが彼らとの距離が近づく良い活動になった。生徒一人一人、勉強へのやる気や得意科目はまちまち。だからこそ一人一人と向き合って相手を理解することが大切だと改めて気づくことが出来た。数学を教えているときには自分自身理解できない部分もあったが、中学生と一緒に解いていくことで一体感が生まれたと思う。部活の話など勉強以外のことも話題に出て、中学生が笑顔になっていることがとても嬉しかった。

太鼓の練習の見学では、言葉にできないくらいの感動を覚えた。彼らの叩く太鼓と後ろで確かに吹かれる篠笛のサウンドはとても力強かった。暑い体育館の中、いくら汗をかいても気にせず演奏を全うしている姿はかっこよくて、その演奏からたくさんのエネルギーをもらった。太鼓練習後の川遊びでは、生徒たちと全力で楽しめた。人生で初めて水切りに挑戦したが想像以上に難しく、簡単にそれをやってのける岩手っ子との力の差を感じた。飛び込みを楽しむ生徒、川で泳ぐ生徒、中には川辺で見学している生徒などいたが、これらの生徒全員と話をし、一人一人の個性をみることができた。教育支援は、勉強はもちろん、生徒と私たちの距離を近づけることが出来るととても素晴らしい機会だった。(地球社会共生・1年女子)

【今後の展望】

生徒は普段接する機会の少ない大学生に対して関心を持っており、同じことの繰り返しになりがちな学校生活の中で刺激を与えることができるので中学校での活動の継続をする必要を感じた。今回はほとんどの時間を3年生と過ごしたが来年度からは1・2年生とも接する活動を行っていきたい。

1,2年生と活動をすることで来年、再来年、3年生になった時の学習支援がより有意義なものになると想定している。

夏休み以外の長期休暇にもプロジェクトを年に数回行い学校と信頼関係を築き、よりニーズに合ったものを提供できるようにしていきたい。

地域支援

【活動場所】二又復興交流センター

【活動期間】8月3日(火)～6日(金)



【参加人数】7名

(中学生に勉強を教えている様子)

【活動背景・目的】

2012年度から2015年2月までは愛宕下仮設住宅集会所をお借りして行ってきた活動であるが、子どもの人数が増えたため、今春からは二又復興交流センターの貸し交流室を利用して活動を行っている。

陸前高田市は津波で甚大な被害を受けた地域の1つであり、沿岸部の住民は内陸部への移住を余儀なくされた。内陸部はバスの本数が非常に少なく、車でないと外出が厳しい状況である。そのため、子どもたちはスクールバスで登校しており学校が終わると友達と放課後に遊ぶことなく帰宅せざるを得ないというのが、気仙中学校の生徒の現状だ。

私たち大学生が放課後に集まれる場所を提供し、勉強や遊びを通して学力の向上や生活のストレスを少しでも軽減できるようにすることを目的としている。

親御さんからは「夏休みの宿題が終わるようにしてほしい。」という声を頂いているため、勉強面ではそれ为目标とし、子ども達からは「複数人で遊びたい」と言われているので、休憩時間に数字を使った遊びやトランプといったような人数が集まったからこそできる遊びを通して交流を図る。また子どもたちの要望に応じて、外遊びなどを行い、熱中症に十分気をつけ適宜取り入れた。



左: 勉強の様子



右: 数字を使った遊びの様子

【活動内容】

午前中は気仙中学校で教育支援を行ってからの活動であるため、初めに大学生、中学生、小学生の全員で昼食を食べてから勉強に移った。昼食の時は、他愛のない会話ではあったが、子どもたちの性格や好みなどを知ることができ、その後の活動に向けて有意義な時間となった。

陸前高田市は夏休みが短く新学期の開始が近いということもあり、夏休みの宿題を終わらせることを優先させた。大きなホワイトボードを使って一緒に考える時間を設けるなどして、子どもたちが飽きずに、できるだけ楽しく勉強できるように工夫した。

休憩時にはトランプだけでなく数字を使ったゲームや外遊びなども行った。

いずれの活動も子どもたちができるだけストレスを感じることなく過ごせるように注意をした。

気になる点があった時は夜のミーティングで話し合い、その日のうちに対応し翌日の活動に備えた。

地域支援

【スタッフの所感】

子どもたちの人懐っこさに驚かされた。私自身、活動前は子どもたちとどのように接すればよいかわからず不安のあるなかで活動を開始した。

しかし子どもたちは普段関わることの少ない大学生に対して興味を持ってくれており、すぐに打ち解けることができた。

これは昨年から数えても、6回に渡る地域支援で、先輩が子どもと良い関係を築けてきているからこそできているのだと思い、私もそのような関係を構築したいと思った。

勉強については自分自身の経験も交えながらうまく伝えられたのではないかと感じた。今回来てくれた子どもたちは中学2年生が多く1年半後には高校受験を控えている。その際に今回伝えたことが少しでも力になればと思っている。

休憩時間に行った遊びも子どもたちはとても楽しんでいるように感じた。

勝ったときは全力で喜び、負けてしまった時は勝つまでやめようとしないう子どもたちの様子が強く印象に残っている。数種類のゲームを用意したことで子どもが飽きずに遊ぶことができた点もよかったのではないかと感じた。

来てくれた子どもの中には、震災後に変化した生活に対して戸惑いを感じていることを話してくれる子もいた。具体的な解決策を私たちが提案できるわけではなく、ただ聞くことしかできないが、それでも聞いているうちに子どもが徐々に、いつもの顔つきに戻ってきたことが初めて活動をした私でも見て取れた。

ここにも先輩が継続して来ているからからこそ生まれている信頼があるように思えた。

初めて地域支援を行ってみて、元気に振る舞いながらも内面ではそのような悩みを抱えていることを知り、今後子どもたちのためにより良い居場所を提供する努力を重ねる必要を感じた。



(勉強を教える様子)



(交流室の様子)

【参加者の所感】

地域の小・中学生と一緒に夏休みの課題に取り組みました。分からない問題をともに考えて解決したり、学習方法について教えたりすることで、とても有意義な時間を過ごすことができました。また、勉強以外のことについても色々話し、遊ぶこともできたため、地域支援の取り組みに参加した生徒同士が仲良くなる姿も見ることができました。

一方で、どのように生徒と関わっていくのかについて迷う場面や、適切な助言をできていない場面もあったと感じたため、どのように行動すべきか今後も考え続けていきたいと思いました。

【今後の展望】

住宅の復旧があまり進んでいないことから現在のように子どもたちが友達と集まりにくい状況が今後しばらく続くと考えられる。そこで長期休暇の期間だけでも私たちが引き続き集まれる場所を提供する必要があると感じている。

そのため、夏期のみではなく冬期・春期休暇にも参加者を巻き込んだプロジェクトを実施する予定である。

地域支援に限らず陸前高田プロジェクトのいずれの活動も被災地の心のケアに重点を置くという理念と現地のニーズの両方を考え、継続的な支援を続けていくことが重要であり、それを基礎に活動を行っていく。

福祉支援・思い出の品

【活動場所】

陸前高田市 思い出の品

※この報告書では

施設名:「思い出の品」、その品々:思い出の品
と「」の有無で表記している。

【活動期間】

8/11～8/13

【参加人数】

3名



(活動を行った思い出の品の施設)

【活動背景・目的】

東日本大震災による津波で住宅から流出してしまった個人の持ち物を洗浄し返却する施設「思い出の品」にて活動をした。「思い出の品」には、現在も数万点に及ぶ品々(写真、御位牌、賞状、記念ボール等)が保管されている。一部を除いてほとんどの品が洗浄され持ち主を待っている状態ではあるのだが、2011年から様々なボランティア団体により、写真洗浄を行いアルバムとして保管を試みた結果、大きさや種類の異なるアルバムとなってしまった。また、多くの方が写真を探した4年の間にアルバムが傷んでしまった。写真だけでも数万枚あり、3日間という短い期間で整理できる写真の枚数は少ないが、写真を探している人のもとへ一日でも早く戻るよう作業をする。



左: 作業中の風景



右: ファイリングを
終えたもの

【活動内容】

洗浄を終え、大きさの異なるアルバムに保管されていたアルバムをプラスチック製のアルバムに移し換える作業を行った。損傷は少ないが表面が変色してしまったものから、損傷が大きく手で触れただけで破れてしまうものまで様々な写真があった。そのため、細心の注意を払って作業を行った。

また、御位牌や記念バットなど実物を出して一点一点探すのは困難な品は写真に撮り、それをコピーしたものをファイルに閉じているのだが、次週の出張返却の際に複数必要ということで、ファイリングする作業のお手伝いも行った。

思い出の品

【スタッフの所感】

「思い出の品」での活動は、昨年に引き続きではあったが、昨年は御位牌や記念バットなどをカメラで写真に撮る作業であった。

そのため、洗浄された写真に直接手を触れる作業というのは初めてで写真を整理していく中で自分のやっていることがとても不思議に思えてきた。自分でも撮ったアルバムを見返すというのはあまりしないことなのに、赤の他人が自分の写真を見る機会は全くと言っていいほどないことだと思ったからだ。古いアルバムから写真を取り出し、新しいアルバムに入れ替えるというのは単調な作業であるが、手に取る1枚1枚の傷んだ写真を見ていると、改めて震災というものの恐ろしさを感じた。

だが、その一方で「思い出の品」に保管されている数万点にも及ぶ洗浄された品々を見ていえると、あの日から多くの人が現地のために何かしたい思いで行動し、1枚1枚、一点一点を丁寧に洗浄したからこそ返却できる状態まで綺麗になった膨大な量の「思い出の品」なのであろう。

4年半が過ぎた今も自分の物を探しに施設を訪れる方がいるのを実際に見て、一日でも早く持ち主の元へ戻って欲しいという思いで活動を行わせて頂いた。



（青色が移し代えた後の新しいアルバム）



（アルバムを代える作業）

【参加者の所感】

何千人、何万人の方の“思い出”が、この一部屋に詰まっていて、この品物すべてがあの日津波に流された、ということ考えると震災について今まで想像でしかなかったものが、ものすごくリアルに突きつけられたようでした。

ボランティアとして私達がいただいた仕事は、アルバムの整理です。持ち主のもとに戻った写真により穴あきの状態で、アルバム自体の劣化もあったので、写真を新しいアルバムに移し替えました。

単純な作業ではありましたが、現実に触れた思いでした。

黄色や赤などの色がついて写真のほんの一部しかわからないような写真や、触ったらぼろぼろと崩れてしまうくらい脆くなっている写真や色が抜けてしまっている写真を何百枚も手にしました。

写真の持ち主が生きていてほしい、無意味ながらそんなことを考えてしまいました。

「思い出の品」にはまだ取りに来られていない品物や写真がたくさんあります。他県では管理する場所がなく廃止されてしまったところもあると聞きました。私は一概にこれらの品物が持ち主の元へ帰ることが良いとは思いませんが、年を経てこれらの思い出や記憶を探しにくる人もいるのではないかと思います。

そういう人のために、その日まで残っていてほしいと思います。（地球社会共生学科1年）

【今後の展望】

いつまで支援を継続していくかの線引きは「思い出の品」が閉鎖されるまでとする方向で考えている。

昨年は6人で思い出の品の活動を行ったが、作業スペースに対して少し人数がように思い、今年は3人で活動を行った。人数が少ない方が集中して活動できるということもあり、来年度も同じか1人増やして活動を行いたい。

また、今春から「陸前高田思い出の品」の近くにある「あしなが育英会陸前高田レインボーハウス」の職員の方と来夏の話をしている。企画としては不十分な点が、可能であればこちらも合わせてプロジェクトとして実施していきたい。

福祉支援・あすなろホーム

【活動場所】

あすなろホーム

【活動期間】

8月10日(月)～8月13日(木)

【参加人数】

7名

(施設内にある利用者の方や職員の方の1年の抱負)



【活動背景・目的】

利用者の方とコミュニケーションをとりながら活動することを目的とする。あすなろホームは障がい者就労継続支援施設であり、最終的には利用者の方が一般企業に就労することを目標として活動している施設である。そのため、利用者の方は普段関わっている職員の方だけでなく、様々な人とコミュニケーションをとることが必要である。そこで、2012年度から継続してあすなろホームに関わっている私たちが活動をともにする中でコミュニケーションをとり、少しでも利用者の方が一般企業へ就労しやすくなることを目的としている。

また、あすなろホームではゆずや藻塩など地元の特産物を使用した商品や、クッキーやシフォンケーキなど製作を制作し、訪問販売やネット販売を行っている。しかし、その商品をイラスト付きでわかりやすく紹介したリーフレットは作っていなかった。そこで今回私たちがオリジナルのリーフレットを作ることで微力ながらも陸前高田の経済に貢献する。



左: ぼかしの作業



右: モザイクアートの作成

【活動内容】

わかめ加工のための下処理や、農作物を育てるための肥料となるぼかし作り、エコ平板の作製や石を使ったモザイクアートの作成を行った。また、事前に検便を行い、菓子製作などにも参加し、利用者の方が普段行っている作業をコミュニケーションをとりながら行っていた。活動最終日はあすなろホームがお盆休みに入る前の最終日と重なっていたため、一緒に大掃除をした。

そして、利用者の方が上半期の活動の反省を記録するお手伝いもした。思っていることを文字に表すことが難しい方もいらっしゃるため、利用者の方が言ったことを文字におこして見せるなどをした。

また、イラスト入りのリーフレットを作成するにあたって、何の商品に重きをおいて紹介したいのか、どのようなコンセプトで作っていくのか、ということを施設の職員の方や参加者同士で相談しながら決定していった。

リーフレットの製作、打ち合わせは主に活動の時間外、特に夜に行った。

より魅力的なリーフレットを目指して、商品の製作に携わっている利用者の方の声を取り入れたいと考え、そのため利用者の方の意見を聞く、といったことも行いリーフレットを完成させた。

あすなろホーム

【スタッフの所感】

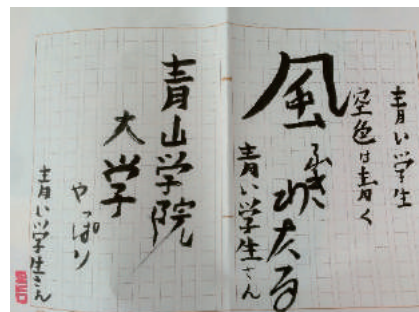
あすなろホームでは、私たち学生と過ごすことで新鮮な時間を楽しんでもらうことを意識した。また、作業をする中で利用者の方とのコミュニケーションを大切にしながら活動した。話すことが好きな方もいれば、物静かな方もいらつやり、その個性に合わせて言葉だけでなく表情や身振り手振りをを用いたコミュニケーションで交流を深め、楽しい時間をすごしてもらえたのではないだろうか。

また、モザイクアートの作業は技術を要するもので素人には難しいものであり、黙々と緻密な仕事をする利用者の方々に尊敬するばかりであった。

その気持ちを伝えた時の照れつつも嬉しそうに笑ってくださった利用者の方の笑顔が忘れられない。

温かな人と人との関わりや助け合う心が、あすなろホームにはある。あすなろホームは陸前高田市の高台に位置しているため、東日本大震災当時、建物は津波からの直接的な被害を免れたが、職員の方々や利用者の方々は震災によりそれぞれ辛い経験をされた。そしてその傷をずっと心のなかに抱えておられると思う。

その中でも優しさと笑顔を決やすことなく元気に働き、復興を願うその姿に私は勇気や元気をもらい、自分には何ができるのかを問うてきた。今、学生ボランティアとしてあすなろホームのためにできることはごくわずかかもしれないが、私はこの先もずっとあすなろホームの皆さんを応援し続けていきたいと思う。



（書道が趣味の利用者の方に頂いた作品）



（上半期の反省を一緒に考えている様子）

【参加者の所感①】

実際に障がいを持つ方と接してみて、自分の持っていた閉塞的なイメージとは大きく異なり、明るくてコミュニケーションをとるのが好きで、仕事に対してものすごく真面目に取り組んでいるということを知ることができました。同時に福祉方面に少し興味を持ちました。（地球社会共生学科1年）

【参加者の所感②】

あすなろホームで活動してみて、利用者さんと関わってみて、こういう表現は嫌いなのですが、私たちと何ら変わらないということに気が付きました。少しだけコミュニケーションが苦手なだけで、むしろ私たちよりも正直で、集中力も持続する、体力もあるなど潜在能力がものすごいと感じました。さらに元気で明るいところもです。最初は利用者さんとコミュニケーションが上手にとれるか不安でいっぱいでしたが、明るくて楽しい利用者さんと接するうちにこっちが元気をもらっていました。（法学科3年）

【今後の展望】

あすなろホームでの活動は目に見える大きな成果が得られる活動ではない。しかし、2012年度から継続した活動を行っていることもあり、ボランティア・ステーションとあすなろホームの信頼関係はより確かなものとなっており、活動を充実したものとするためにはその信頼関係が不可欠である。

そこで、今後はより頻度を高めてあすなろホームでの活動を行いたいと考えている。そうすることでより利用者の方や職員の方とのコミュニケーションがとりやすくなっていくことであろう。

そして、より多くの学生に障がいを持っている方と壁を持たずに接するための機会や情報を提供していきたい。

インドネシアプロジェクト



インドネシアプロジェクトリーダー 国際経済学科3年 吉田 真弓

私たち大学生が異国の地でボランティアといっても、たった2週間でできることは限りなく少ない。ゼロに近いといってもいいだろう。それでもなぜ私たちは海外でボランティアを続けるのか。自問自答を繰り返した。

できることが限られているならば、せめて想いを伝えたい。人と人のつながりを大切にしたい。それが私の答えだ。今年、Skypeはリアルタイム自動通訳を可能にし、ANAは世界初の自動手荷物預け機を導入した。さらには2020年、全自動運転車が公道を走るかもしれない。近い将来、機械が我々人間の仕事を奪う。そんな時代だからこそ、人間ができて機械にはできないこと、「想い」を大切にしたい。

インドネシアプロジェクトは、村で現地の方の家に泊まり現地の学生と共同生活をする。村の人々の価値観に触れ、学生自身で現地のありのままの姿と向き合う。途上国の村で生活したいと思う大学生なんて、そうそういないだろう。それでも、「この村のために何かしたい。」その気持ちが伝わってようやく、村民の方々と現地の学生に村の一員として受け入れてもらえる。その大前提があった上ではじめて活動を共に考えることができる。先進国の一大学生の小さな想いが村に届くことを願い、初年度の活動を終え、来年度から継続的な活動を行っていきたい。

インドネシアプロジェクト



2016年度インドネシアプロジェクトリーダー 教育学科1年 能登 貴一

この度インドネシアプロジェクトリーダーを務めることになりました教育学科一年の能登貴一です。今年度の活動では発展途上国の経済面に焦点を当て地方創生活動に参加してまいりました。

テーマとして掲げたのは「一村一品運動」で、村それぞれに一つの特産物をつくることを目的として現地学生と共に課題解決に取り組みました。はじめは不慣れな異国での活動でしたが、現地学生だけでなく現地住民の温かい待遇に恵まれ、円滑に活動をすすめることができました。そんな国のためにもっと貢献したいという思いからこのプロジェクトのリーダーになることを決心いたしました。

今現在、来年度の活動を計画中ですが、分野を教育・医療・防災の3つに絞って話し合いをすすめています。どれも今年度の活動で見つけ出した課題であり、先進国の学生である私たちが貢献できる可能性は多大にあると考えています。これからスタッフ5人のスキルを総動員して課題解決のため取り組んでまいります。

インドネシアプロジェクト

【活動場所】 インドネシア ジャワ島イモギリ郡スリハルジョ村

【活動期間】 8月11日～8月25日

【参加人数】 スタッフ9名



スナック工場の前にて

【活動背景・目的】

インドネシアでの活動は2011年から4回活動してきたが、前回までの活動は災害調査やガジャマダ大学の学生との異文化交流などの活動でボランティアの要素はあまりなかった。前年度はガジャマダ大学の日本語学科でのボランティアを組み込んだプログラムだったが、ボランティア・ステーションの一員として今年度はさらにボランティアを盛り込んだプロジェクトにするために、ガジャマダ大学の教授、学生と共にボランティアを企画し参加することにした。ガジャマダ大学の学生は夏期に約2か月にわたって、コミュニティサービスというプログラムに参加することが義務づけられている。コミュニティサービスとは学生たちの専門分野に応じた知識を生かして地域に根付いた奉仕活動を行い、現地住民と共同して地域の活性化を図るためのプログラムである。今回はジョグジャカルタの都市部から車で1時間ほどのイモギリ郡スリハルジョ村での活動を行った。この村ではカバンや木材を使った工芸品や、大豆料理のテンペを使ったスナックといった産業があり、それらをさらに発展させることが村の活性化につながると考えられる。中小企業の発展のためのプログラムを中心に日本人の視点を生かし、地域の活性化に貢献することが求められる。また現地のニーズや問題点を探ることで、来年度以降の活動に生かすことも目的として挙げられる。



左：小学校での授業



右：産業発展のためのディスカッション

【活動内容】

ガジャマダ大学の学生と共に村の学校訪問、衛生教育、中小企業活性化のプログラムに参加した。学校訪問では村の幼稚園と小学校を訪問し校長先生とインドネシアの教育事情や問題点、日本の教育との共通点相違点について意見交換をおこない、2グループに分かれて日本語の授業も行なった。日本語の簡単な挨拶や平仮名カタカナ、折り紙を使って鶴や紙飛行機を教えた。子どもたちは覚えるのがとても早くまた学習意欲も高い印象を受けた。しかしその一方で経済的理由から学校に通えない子どもたちが少なからずいることも確かであった。

衛生教育プログラムでは歯科検診と健康診断の補助を行った。小学校で実施した歯科検診は村で初めての試みであり歯磨きの大切さ、健康意識を高めるプログラムであった。また主婦を対象にした健康診断では血液検査や実習も行ない、自宅でも血圧計など簡単な器具を使えるよう指導を行った。

そして今回のメインプロジェクトであった地域の中小企業活性化プログラムではテンペを使ったスナック工場と木材工場と布製品製作現場を見学し、工場を経営している人、現場で働いている人、それぞれの産業で携わっている人からお話を聞かせていただいた。またそれに伴うディスカッションをガジャマダ大学の学生と行ない、中小企業に対する新たなサジェスションを提示した。村を活性化させるために産業の発展が必要だが、住民の方々はその意思が弱い。この村で作られた製品は都市部や海外にも渡っている製品も多いため、その利益を村に還元し、いかに発展させていくかが課題となっている。

また現地での活動期間中がインドネシアの独立記念日と被っており連日行われた村単位でのコンペティションや前夜祭、独立記念日パーティーにも参加でき、住民の方々とより交流を深めることができた。

インドネシアプロジェクト

【スタッフの所感①】

今回インドネシアプロジェクトでは、村の観光化を図るために、ガジャマダ大学の生徒と活動した。衛生・教育・産業といった専門分野ごとに開発を進めていたのだが、来年度の視察も兼ねていたため、今回は様々な分野の活動に参加した。産業面では、スナック菓子の広報・製造方法の改善点について話し合い、私達1人1人の専攻内容である経済や経営、国際理解等の知識を用いて産業の活性化への手助けがきた。

自分達が普段学んでいることが人の役に立つという経験を、身をもって知ることができた。また、教育面に関しては、折り紙を折ったり、日本語の挨拶を教えたりといった活動を通して、日本の文化を伝えることができたと感じた。さらに、校長先生とお話する機会も設けていただけたために、インドネシアでの教育の現状を知ることができ、そのお話から教育制度の整備が不十分であることを知り、教育の大切さを伝えていくべきであると感じた。

その他にも、2006年の地震で被災した地を視察したり、幼稚園を訪問したり様々な活動を行った。その中で、自分たちが本当にボランティアをすべき分野は教育・衛生環境・医療・防災等についてであると気づくことができた。今後は、この経験を来年度やそれ以降の活動にどのように繋げられるのか、考えていきたいと思う。



スナックのカットアップの様子



村のコンペティションに参加している様子

【スタッフの所感②】

今年度のインドネシアプロジェクトは村の観光化が最大の目的であり、これはインドネシア政府の観光地政策の一環でもある。この活動では現地の学生とともに村で生活を過ごし、様々な手段から地域の活性化を図った。普段感じる事ができない雰囲気の中、自分の目や耳から感じたことから現地のニーズ、問題の解決策などを探す日々は非常に充実したものとなった。

特に記憶に残っているのは、一村一品運動である。一つの村に一つの特産物を作るこの活動で私たちは“どうやってその特産物を村に定着させるのか”を地域産業の視察で発見し、現地学生と話し合いを重ねて村民に意見を出していくという繰り返しを行った。それぞれが全く違うことを感じ、異なるアプローチから自らの考えをフィードバックしていく話し合いはインドネシアの未来にとってかなり有意義であったと思う。そして本当の国際貢献とはこのことではないか、と肌で感じた瞬間でもあった。

【今後の展望】

今年度はじめてこのプロジェクトを実施するに至ったが、企画段階において当初の計画通りに進まないことが多く、課題が数多く残る。特にガジャマダ大学との連絡に苦戦を強いしたが、来年度は今年度培った人脈で企画を密にしていきたい。

来年度からは他プロジェクトと同様に一般参加者を募集していきたい所存である。そのためには活動内容やスケジュールを事前に綿密に計画する必要があるが、このプロジェクトは村に住む方々と大学生が話し合い活動内容をフレキシブルに決めていく。現地のニーズに合わせた活動であることのよさを生かしながら、日本式に活動内容を具体化させていきたい。活動内容に関していえば、今年度初参加ということもあり、ボラステストスタッフからの提案は少なかった。ガジャマダ大学の学生は各々の専攻分野に合わせて一人ひとり個別のプログラムを実施していた。来年度以降私たちボラステストスタッフとして村の振興に生かせるものがあるとするならば、衛生教育と災害対策、また日本語教育だと考える。言語の壁を超え、私たちの想いを伝えるには現地学生との連携が欠かせない。

またこのプロジェクトの魅力のひとつとして、村長のお宅で村長のご家族、ガジャマダ大学生との共同生活が挙げられる。村民と共に生き、村の生活習慣を理解することで、先進国の一方的な価値観の押し付けにならない、村の方々と持続可能な発展に向け共に歩んでいくという、新しい形のボランティアを模索していきたい。

フィリピンプロジェクト



フィリピンプロジェクトリーダー 総合文化政策学科2年 新井 健斗

今年で4年目を迎えたフィリピンプロジェクト。

これまで行ってきた小学校での異文化交流に加え、今年度は現地からの要望であった理科実験、音楽教育を一過性のものにしないために実施した鍵盤ハーモニカ講習会、島の雇用創出を期待したカラムンガイプロジェクトを行った。

多くの先輩方がシキホール島で活動を真摯に取り組んできたことによって、教育委員会、小学校の先生をはじめとする島の方々の信頼を得ることができ、新たな活動を試みることができました。

活動中に小学校の先生から、現地でボールを寄付してくれるのもすごく嬉しいけど、なによりこんな遠くからわざわざ来てくれることが嬉しいのだというお言葉を頂き、“give”より“care”の大切さに気付かされました。継続すること、現地の人の想いに寄り添うこと、そして大学生の私たちにしかできないことをやっていく必要があるのではないのかと感じました。

最後になりますが、企画段階から現地での活動まで多くの方々のご協力のおかげでフィリピンプロジェクト実施することができました。この場を借りて御礼申し上げます。

ご迷惑をおかけしてしまうことが多々あるかもしれませんが、今後ともよろしくお願い致します。

フィリピンプロジェクト



フィリピンプロジェクトリーダー 教育学科1年 西溜 夏美

笑顔。

このキーワードは2015年の夏、初めて活動地のフィリピンシキホール島を訪れる以前に何度も先輩方から耳にしてきました。

「本当に子供たちの笑顔がきらきらしていて…」

夏期活動後、先輩方と全く同じ言葉を発している自分自身に驚きます。それでもこの言葉抜きでは言い表すことができないほど、笑顔が印象的な島です。

ある小学校を訪れた時、子供たちに将来の夢を聞いてみました。

学校の先生、歌手、お医者さん…

次々に答えてくれる子供たちはやはり希望に満ちた笑顔でした。

そんな子供たちもフィリピンの抱える様々な社会問題に直面します。今の子供たちが大人になっても、一人残らずこのきらきらした笑顔を忘れぬまま生活できるようになって欲しい。それが活動を通して生れた私の願いです。

国際部の活動は他部に比べて、言葉の壁もあり費用もかかり安全性も懸念されます。一般学生にとって敷居が高く感じるかもしれません。そして私たちが現地で行う活動は1回の活動で劇的な効果を得られるものではないかもしれません。それでも青学生と子供たちの双方にとって何か一歩新しい世界が見えるきっかけを提供できるようなプロジェクトにしていきたいです。

フィリピンプロジェクトはいよいよ5年目を迎えます。ここまで当プロジェクトを築き上げてくださった先輩方の思いを引き継ぎ、子供たちの笑顔を胸に描きつつ、より良いプロジェクトにするべく頑張ります。

フィリピンプロジェクト

【活動場所】

フィリピン シキホール島

【活動期間】

2015年8月14日～27日（2週間）

【参加人数】

国際部スタッフ 4名

学生参加者 3名

計7名



集合写真

【活動背景・目的】

シキホール島の小学校は、教育環境の整備が不十分である。教材(教科書、理科の実験道具、ボールやラケットなどの体育道具、テレビやパソコン)が完備されていない状況で、普段行われているのは黒板とチョーク、鉛筆を使って受ける教室内での授業のみである。そこで私たちは、日本の子どもたちが遊ぶような外遊びや、ソーラン節と一緒に踊ることで普段味わうことのないエキサイティングな時間を提供したいと考えた。また、今年度からの新たな試みとして、島では器具の不足により理科の実験が行われていないという現状であるため、島にあるものだけを用いて先生が実演できるような実験を準備し、子供たちの前で披露することを計画した。

さらに、海外から観光客は来るものの、フィリピンは島国であることから、普段子どもたちの生活の中で外国人と触れ合うことが少なくネット環境も充実していない。したがって、シキホール島の子どもたちは異文化を学ぶ機会がない状況である。私たちは、日本の文化の一つである折り紙を用いて、英語を交えながら交流を深めたいと考えた。



左：理科の実験



右：鍵盤ハーモニカ講習会

【活動内容】〈小学校での活動〉

1日3校～4校の小学校を訪問し、ソーラン節、外遊び、折り紙、理科の実験を行った。来年度開催予定のソーラン節大会に向け、今まで訪れたことのない小学校を中心にソーラン節の指導を行った。大会でチャンピオンに選ばれた学校には音響機械やテレビ、パソコンなどの寄贈を考えている。したがって、より多くの学校にこの大会に参加してもらいたく、約7日間の活動日の中で25校を訪問した。外遊びでは、各学校の子どもたちの反応に合わせて、ボール渡し競争やハンカチ落とし、しっぽ取りゲームを行った。これらの簡単なゲームの中で、勝つための工夫やチームプレイによる助け合いの気持ち、ルールを守ることの大切さを伝えた。折り紙では、子どもたちの理解力や人数に合わせて、紙飛行機や鶴を作った。さらに、英語が通じる高学年を対象に、ペットボトルろ過装置を用いた理科の実験を披露し、考える力や友達同士で教え合う力を身に付けさせることを意識した。

また、現地コーディネータの原田さん提案の新企画である、カラムンガイプロジェクトをお手伝いした。プロジェクトの一環として、カラムンガイの苗を子どもたちと一緒に畑に植える作業を行った。

〈鍵盤ハーモニカ講習会〉

島の小学校の先生方を対象に、教育委員会の後援のもと鍵盤ハーモニカ講習会を実施した。音階、指番号から始め、「キラキラ星」や「かえるのうた」など、私たちが見本を見せつつ鍵盤ハーモニカに親しんでもらえるよう努めた。音楽の先生とはいえ、鍵盤を弾くことは日常的にあることではないため、数時間でマスターすることは困難だったが、最終的には30人以上の先生がフィリピン国歌の一部を演奏できるまでになった。

フィリピンプロジェクト

【スタッフの所感①】

2年目の参加となった今年も、私たちが与えるものより子どもたちをはじめとするシキホール島の方々から与えられたものの方が多かったと思います。来年度はフィリピンプロジェクトの集大成ということで1年をかけて企画を作り上げていきたいと思っています。



ソーラン節と一緒に踊る子どもたち

【スタッフの所感②】

準備期間を含め、このプロジェクトにかけた全ての時間が私にとってはかけがえのないものとなりました。2度目のシキホール島訪問を終えた今、子どもたちの輝く笑顔、島の方々の温かさ、そしてプロジェクトを継続していくことの素晴らしさを実感しています。来年度に向け、さらなるプロジェクトの向上に努めたいと思います。(文学部2年) いつだって素直に私たちが提案する動に取り組んでくれる笑顔いっぱいの子どもたちばかりでした。子どもたちが成長した後もこの笑顔をずっと守り続けることができるような活動を更に長期的な目で考えていきたいと思いました。



カラムンガイの苗を植える少女とスタッフ

【スタッフの所感③】

現地の子どもたちが限られた環境の中でも常に笑顔で、異国の人間である私たち日本人にも温かいおもてなしをしてくれたことが非常に印象的でした。そして活動を終えて、自分自身が精神面で大きく成長できたと同時に、まだまだ未熟であることも実感しました。

【参加者の所感①】

今回この2週間は私の人生のなかでとても大切に貴重な経験になった4と思います。たくさんの人の努力やサポートの中で、現地の子どもたちと触れ合い、自分自身が成長させられることばかりだったのでこの経験を今後活かしていきたいです。(経営学科1年)

【参加者の所感②】

フィリピンの中心から離れた田舎の島と聞くと、貧しいのではないかといった先入観で考えてしまいがちでした。しかし、実際現地に入ってみれば貧しいどころか、皆がキラキラしており、とても生き生きと活気に溢れた、非常に明るい島でありました。励ますつもりで臨んだ自分が逆に元気をもらうことができ、とても忘れられない経験をすることができました。このような機会を与えてくださってありがとうございました。(国際政治学科1年)

【今後の展望】

私たちが訪問したシキホール島の子どもたちはいつでも満面の笑顔であり、先生方や島の方々はみなとても温かく活動のサポートをしてくださった。そんな環境のもとで活動していく中で本当の豊かさとは何かを考えさせられるとともに、より学びやすく、子どもたちの可能性を広げるために、私たちにできることが何かあるのではないかと考えた。水道や音響設備がない学校、3人で1つの古い教科書を見て授業を受けている様子、おそらく初めて楽器を使った遊びをするであろう子どもたちや実際に目の前で理科の実験が行われていることに感動する子どもたちの様子。日本の小学校のように校庭に遊具が設置され、倉庫に自由に使える一輪車やボールがある学校はほとんど見受けられなかった。もちろん、異文化と触れ合う機会ほとんど無いに等しいであろう。まずは、活動を通して目の当たりにしたこれらの現状をもとに、子どもたち、学校、そして島民の生活にとって必要だと思われることを考えていく。その際、夏期活動だけでなく日本での活動を含め私たちにできる範囲でそれを補っていく活動、さらに、私たちが訪れる一時だけでなくより長期にわたって子どもたちや島民の将来、または生活に役立つことができる活動を模索していきたいと考える。

このフィリピンプロジェクトは4年にわたって活動を継続してきた。これまでの活動経験や活動記録を活かして、ここまで引き継がれ磨かれてきたプロジェクトをさらに発展したものにするために技巧を凝らしていきたい。

ネパールプロジェクト



ネパールプロジェクトリーダー
法学科2年
吉川 祐太

私たちネパールプロジェクトメンバーは毎年2月の春期休暇を利用し、ネパールを訪れ活動をしています。主な活動拠点は首都のカトマンズ近郊となります。当プロジェクトの活動は教育的ボランティアを軸に構成されています。深刻な社会問題として注目されているごみ問題改善のためのクリーンアップキャンペーンや山間部の小学校での手洗い・歯磨き指導の衛生教育は例年行っている活動になります。そして今年度より新たなプログラムを企画しています。

2015年4月25日に発生したネパール震災は記憶に新しいかと思います。ネパールは決して地震が少ない国ではありません。そこで、今年度よりクリーンアップキャンペーンと衛生教育の活動後に防災教育を取り入れることにしました。

活動参加児童や生徒に私たちの作成する、ネパールで有効な地震対策の絵本を読み聞かせることでもし次に地震がきた場合でも自分自身そして周りを守るような環境作りに寄与できればと考えています。そして当部と以前より関わりのあるNPO法人が運営する小学校も訪問し、異文化交流という名目で普段できない体験をしてもらい交流を図ります。

以上の活動成果はすぐに効果が表れるものではなく、さらに目にも見えにくいものです。しかし、小さなことでも継続して活動を行っていくことに意味があると私たちは考えています。今後も現地のニーズを踏まえた活動を行っていきます。

※ネパールプロジェクトは2016年春に活動を予定しているため、この年次報告書には掲載されておりません。ブログやFacebookにて掲載されておりますので、そちらをご覧ください。

こちらには救援募金のみを記載させて頂いております。

青山学院大学

ネパール地震 救援募金

4月25日、ネパール中部で
マグニチュード7.8の地震が発生しました。

死者：7675人 負傷者：16,392人（8日現在、国連）

皆さんかいご支援お願いします。

支援先

お預かりした救援金は全額各団体に均等に送金いたします。

YouMe Nepal Trust

ネパールでの学校建設や運営を行っているNPO団体で、現在は情報発信や復旧活動も行っています。
支援金は、短期・長期にわたる子どもの支援に充てられます。

ボランティア・ステーション経由

Child Fund Japan

アジアを中心に子どもの貧困対策を行っているNPO法人です。支援金は、食糧や、屋外での生活を強いられている人に向けた地面に敷くシートやトタン屋根の支援に充てられます。

宗教センター経由

合同メソジスト教会

世界各国のメソジスト派による連合です。
支援金は、Global Medicを通じた水の浄化ユニット、毛布やタープの支援など、関係機関を通じた支援に充てられます。

宗教センター経由



募金実施 青山学院大学

校内募金活動 青山学院大学ボランティア・ステーション

募金箱設置場所 宗教センター、購買会内 他

募金実施 5月12日～5月29日

今後の状況やネパールの情報について

ブログ、Facebook、Twitter にて随時お知らせします。



ネパール地震救援募金

【活動場所】

青山学院大学構内 正門前、17号館前、ガウチャー記念礼拝堂前等

【活動期間】

5月12日～29日 昼休み、4限後、5限後

【参加人数・協力】

ネパールプロジェクトスタッフ7人、
スタッフ有志メンバー20人
宗教センター、IVYCS(購買会)



募金の呼びかけを行う様子

【活動背景・目的】

4月25日にネパール カトマンズ市から80kmを震源に発生したM7.5の地震により、被災者数は2015年5月時点で人口の3分の1に相当する800万人にのぼると言われているほか、歴史的建造物や家屋の倒壊等大きな被害が発生した。首都カトマンズ市の主要病院は満杯で、地震など災害の経験や知識が乏しいネパール国民の混乱が続く状態となった。ネパールは2008年に民主化がなされたが、事実上憲法が機能しておらず、政府が機能していないため、他国からの支援に対するニーズが高い。緊急支援として倒壊した家に変わるシェルターや水、食料、医療の支援が求められた。

ボランティア・ステーション国際部ではネパールで活動を行っており、活動でお世話になっている方々や知合った学生から被害の様子が伝えられ、私たちにもできることはないだろうかと考え募金活動を行うこととなった。



呼びかけ用の手持ち看板



募金箱

【活動内容】

ネパールでの大地震を受けて、学内にて昼休み、4限後と5限後の約30分間に正門前、西門前、記念館前、17号館前、ガウチャー記念礼拝堂前等で募金活動を行なった。募金箱、看板、チラシを用意して呼びかけを行い、チラシと看板にはネパールの特色や被災状況、募金先等を記載し、ネパールについて学生に知ってもらえるようなレイアウトを適用した。学生ポータルにて募金への協力を呼び掛け、5月12日から29日の活動期間内にはA型立て看板をメインストリートに設置した。また、1号館購買会に募金箱を設置し、週に一度スタッフが寄付金の回収を行った。さらに、被災地の現状や募金総額については、ボランティア・ステーションのブログ、Twitter、facebookで報告した。この募金活動は宗教センターと合同で行い、学内で集まった寄付は、ネパールで日本の教育を取り込んだ小学校を運営するNPO団体YouMe Nepal、アジアを中心に子ども達の貧困対策を行っているNPO法人Child Fund Japan、世界各国のメソジスト派による連合である合同メソジスト教会に均等に送金した。

ネパール地震救援募金

【スタッフの所感】

今回の募金活動は4月25日の地震発生後、ネパールのために何かできないかという声から始まった。地震直後は活動中に知り合ったネパールの学生たちとの連絡が取りづらく混乱していたが、時間が経つにつれてメディアでも大きく取り上げられていたように建物の被害が甚大であり、多くの方が被害に合い厳しい生活を強いられていることがわかった。ネパールプロジェクトのスタッフは実際にネパールを訪れているが、この震災の募金を通してネパールの新しい一面や内情を知り、ネパール人とのつながりを通して、よりネパールと近づくことができたのではないかなと思う。募金活動は集めた募金の流れがわかりにくく、現地のために役立っているのか実感しにくいことや、学生は少額でもいいのだろうか、といった声もよく聞かれるため、募金先を明確に伝えるなど効果的な呼びかけとなるよう工夫し、SNSでも随時募金状況や募金先について伝えることを心がけた。活動準備期間が短かった中、ボランティア・ステーションのメンバーが一丸となって活動を行い、青学生や教職員の方々からの多くの協力を得ることができた。しかしメディアではネパールの地震について取り上げられることが少なくなってきたおり、風化を防ぐことが必要であると感じている。



17号館前での募金活動



構内に設置した立て看板

【今後の展望】

まず今回の募金活動の運営面では準備期間が短く至らないことが多かったため、当団体スタッフや職員の方々にご迷惑をおかけしてしまった。今後は緊急性の要する企画への対応を早め、周到に準備をした上で速やかに活動を始めることが求められる。

募金活動は約3週間という限られた期間だったが、私たちの予想を超える多くの協力を得ることができた。今後は募金先でどのような活動に役立てられているかを伝えていきたい。また多くのネパール人留学生が日本で学んでおり、文化的交流も盛んなネパールがどんな国なのかについて知っていただき、より日本とネパールの関係を近づけていきたい。そのためにブログやSNSを使ってネパールで活動している私たちだからこそできる情報発信をしていく。募金先には昨年度から関わりのあるNPO団体もあったため、現地での活動にあたって今後ともより関わりを深めていきたい。ネパールの復興には長い時間を要するだろうが、私たちができることを続けていくことで復興に少しでも役立つことを期待する。

青山学院大学同窓祭

【活動場所】

青山学院大学記念館

【活動期間】

2015年9月23日(水・祝)

【参加人数】

17名



メインストリートの様子

【活動背景・目的】

AOYMA GREEN FESTIVALとは、主に同大学卒業生による同窓祭実行委員会が主催するイベントであり、交友やクラブ、サークル、各同窓会などによる模擬店の出店やステージでのパフォーマンスが行われる。子どもから大人まで大勢の人々が集うこの同窓祭に、ボランティア・ステーションとして参加させていただくことで、学生だけでなく様々な年代の、多くの方々に私たちが行っている活動を知っていただく。また同時に、東北ならではの食材を生かして作られている商品を買っていただくことで、食を通して少しでも東北に興味や関心を持っていただき、さらなる販売促進につなげる。



左写真:販売ブース



右写真:看板を作って宣伝

【活動内容】

昨年に引き続き、東北部として現在活動を行っている宮城県塩竈市と岩手県陸前高田市の商品を販売した。具体的には、塩竈市からはかまぼこや干物、特産品であるずんだを使ったお菓子などを、陸前高田市からは現地で世話になっている方が経営されている農園のきゅうりやピクルス、トマトジュースを販売した。また、ただ商品を販売するだけでなく、商品を買って下さった方に対して、その商品を扱っているお店の取材記事をまとめたものや、塩竈市に興味を持ってもらうために塩竈市の魅力について焦点を当てて作成したパンフレットを配布した。さらに、この同窓祭を通して、ボランティア・ステーションを学外の方々にも知っていただきたいと考え、私たちがどのような団体であるのか、具体的にどんな活動をしているのかという内容を簡単にまとめたリーフレットも作成し、同様に配布した。その他にも、塩竈プロジェクトでは経済復興支援の一つとして、塩竈市の良さを伝えるために学生自らが市場やお店に赴いて取材をし、PR動画を作製する活動を行っている。今回はそのPR動画を活用できる良い機会だと考え、販売ブースにおいて昨年度と今年度で作製した動画を流し、塩竈市をより多くの方々に知ってもらえるよう広報した。

青山学院大学同窓祭

【スタッフの所感】

私は初めてこの同窓祭に参加したので、東北の物産品にどれくらいの方が興味を持って買ったださるのだろうかと疑問に思ったり、現地から取り寄せた商品の種類と品数の多さを知ったときには、こんなにたくさん売れるのだろうかと正直なところ不安に思ったりもした。しかし、いざ販売し始めると、興味を持って足を止めて下さる方がたくさんいらっしゃり、午前中で売り切れてしまうものもあったくらいであった。また、販売を行った記念館の外で看板を持って声を出しながら宣伝しているときも、“東北の物産”というキーワードを聞いて何人もの方が、「どこで売っているの？」と尋ねて下さり、関心を持って下さる方の多さには驚いた。当日は塩竈市の方もこちらに足を運んで下さり、その商品の特徴や美味しさを宣伝して下さった。その効果もあってか、様々な方々のご協力のもと、ほぼ全ての商品を売り切ることができた。また、試食や試飲を積極的に促したり、商品を取り置きできるようにしたりしたことで、買って下さる方も多くいらしたかったので、販売方法も工夫できたと思う。そして、今回は商品を販売すると同時に、塩竈市や陸前高田市、東北全体のこと、私たちボランティア・ステーションのことをより多くの方々に知っていただくという目的も兼ねていたため、活動地域の魅力が伝わるパンフレットや活動を紹介するリーフレットを配布できたのはよかったと思う。また、商品を扱っているお店の取材記事や塩竈市の良さを伝えるために作製したPR動画など、今までWEB広報活動で取り組んできたものを活用する良い機会にもなったと思うので、これから少しでも多くの方が東北に興味を持ち、そしてぜひ足を運んで下されば幸いである。私たちは今後もこの同窓祭のように、現地においてだけでなく、東京においても東北のためにできる取り組みを考えて、実行していきたい。

【今後の展望】

今回の同窓祭を通して、東北の物産品に興味関心を持って下さる方が多いことやリピーターとして毎年楽しみにして来て下さる方がいることがわかったので、今後もボランティア・ステーションとしてこの同窓祭に参加させていただき、活動を行っている塩竈市や陸前高田市、そして広くは東北全体に興味を持ってもらえるよう、商品の販売や広報活動を継続して行っていきたい。また、今回は販売ブースでの商品販売のみであったが、活動や現地のことをより具体的に紹介する展示や実際にボランティア活動をしての経験を伝えられるような取り組みもできたらよいのではないかと考えている。そして、今後は東北だけでなく、他の地域で活動をしている国際部や地域部も交えて、それぞれの活動を紹介したり、活動地域の広報活動をしたりなど、ボランティア・ステーション全体として、この同窓祭に関わっていけたらと思う。



右：塩竈市の干物

左：販売した商品



上：販売している様子

Meal for Refugees

【活動場所】

17号館学生食堂

【活動期間】

10月5日(月)～9日(金)

【参加人数・協力】

国際部・地域部スタッフ 計5人
IVYCS(食堂)



(17号館学食のポスター前にて)

【活動背景・目的】

Meal for Refugees(以下M4R)とは、認定NPO法人難民支援協会(JAR)が発行したレシピ本「海を渡った故郷の味 Flavours Without Borders」から生まれた難民支援プロジェクトである。レシピ本に再現されている在日難民の故郷の料理を、大学の学生食堂のメニューとして導入し、多くの学生食堂利用者に日本にいる難民の方々のことを認知してもらうことを目的としている。並びに、売上金額の一部をJAR(難民支援協会)に寄付することによって、日本にいる難民の方々の認知度を高めるとともに直接的な支援にもつながる。本大学では今年が初の試みであり、実施を進めている大学は年々増加している。

青山学院大学では難民の推薦入試を実施しているため、難民が「身近に」いるといえる。だからこそM4Rを通して、難民は自分たちには関係のない遠い存在ではなく、身近な存在であるということを少しでも多くの学生食堂利用者に認知してもらうことには大きな意義がある。また、当団体のブログやSNSによる情報発信などを通して、難民問題に興味を持った人や以前から興味を持っていた人が以後調べて行けるような情報の導線となることも目的である。

M4Rの導入は、当団体としても初めての試みであったため、ひとまず今年度は「日本にも難民がいる」ということを認識するためのきっかけ作りとなり、来年度以降も継続的に、より多くの学生食堂利用者と共に難民の方々を支えてゆける活動の基盤となれたのなら幸いである。



左写真：
スタッフ勉強会の様子



右写真：
試食会の様子

【活動内容】

夏期休業を利用し企画準備を行った。勉強会では各スタッフが難民について調べてきたことをプレゼンテーションにて発表・共有し、難民についての知識を深めた。当団体のSNSを利用し、プロジェクト内容の紹介や難民について学んだことを踏まえた情報提供を数回行った。また、情報発信に利用する三角立てやチラシなどの広報物作成なども行った。

9月14日に17号館学食にて試食会を実施し、販売価格を決定した。

9月24日から難民について知ってもらうために、昼休みと4限後のビラ配りを開始した。

10月5日から9日にかけて、M4Rのランチメニュー『鶏肉と野菜のスパイシー炒め』を、1日50食の限定で17号館学生食堂に導入した。初日にインタビューをし、二日目以降の広報活動に役立てた。

5日間で計195食が販売され、集まった寄付金は20円×195食＝3900円となった。この寄付金が、難民支援協会を通して日本にいる難民の方々への支援の一部となる。

Meal for Refugees(M4R)

【スタッフの所感】

日本は難民に冷たい国であると言われている。しかし、当企画によって難民を「知る」機会を提供したことで、難民問題に関心を持ってM4Rメニューを食べてくれた方々もいた。

生活に欠かせない「食」を通じた当企画のような支援の形は、誰もが気軽に参加しやすい。今後も継続的に実施することで、より多くの方々に難民問題を認知啓発できることを期待する。（国際政治経済学部3年）

生活に欠かせない「食事」のなかで、難民を支援することができる当企画は、私たち学生にとって非常に取り組みやすい支援のカたちだと実感した。また、企画を進めていくなかで、日本にいる難民に対する知識不足に気づくこともできた。実施を終えた今、20円の積み重ねが多くの方のご協力により200倍近くにまでなったことに大きな喜びと感謝の気持ちでいっぱいである。（文学部2年）

今回このプロジェクトに携わって、多くの学生が難民に対して抱いているであろう隔たりを、多少なりとも緩和できたと思う。また、美味しく食べることで寄付もでき、難民についても知ってもらえるこの取り組みは、食という身近なことに関係していたので、募金よりも身近に感じてもらったと思う。（文学部2年）

これまで難民と聞くと日本には関係のないことと思っていた人も多いと思うが、最近のニュース等により国内で問題意識を持つ人が増えたと感じる。そこで当該企画を実施できたことは当初の目的であった認知拡大に貢献できた。今回のみの活動に留めてしまうと問題意識や当事者意識は薄れていってしまうため、今年度のみで終わらず今後も継続して貢献をしていきたい。より多くの人に関心をもってもらうことにより、法律や規制緩和に寄与するため国としても今後難民に対する姿勢が変わることに貢献できると良い。（法学部2年）

今回のプロジェクトに参加しなかったら、自分の難民に対する関心は、薄いものに留まってしまったかも知れないと感じる。一人でも多くの方がこの問題に自発的に向き合えるように、今後も継続的な支援へと繋がることをしてゆきたい。引き続き、難民に対しての関心を持ち続けて行くことこそが、自分にできる一番の支援だと思う。（国際政治経済学部1年）

【今後の展望】

・限定感を推し出すためにも、1週間程度という期間設定は適切だったが、難民問題は継続的な支援や活動こそが大切なので、数か月に一回程度のペースで継続的に実施して行きたい。また、衣料品回収などの直接的な支援活動とも合わせて、規模を拡大して行きたい。

・難民支援協会の方など、現状で働く方々を学内にお呼びして講演会をあわせて行うことで、難民に関する情報をより広く発信する機会を作る。



上: 初日に購入してくださった方

下: 17号館学食の電子公告



上: 『鶏肉と野菜のスパイシー炒め』

青山祭

【活動場所】

青山学院大学青山キャンパス

【活動期間】

10月30日(金)～11月1日(日)



3日間お疲れ様でした！

【参加人数】

ボランティア・ステーションスタッフ48名

【活動背景・目的】

毎年10月末になると本学の学園祭「青山祭」が開催される。そこで、大学内外の多くの方々に弊団体のことを知ってもらうために、模擬店の出店と教室での活動展示を行っている。毎年出店では、活動先にゆかりのある食べ物などを販売して、そのうちの売上金の一部を寄付している。また、展示では年間の活動を模造紙にまとめて貼りだしたり、動画を流したりして来場者の方々に、より身近に感じてもらえるよう工夫を凝らした。今年は「ボランティアの魅力を知ってもらう」ことをテーマとし、活動展示では上記の模造紙、動画のほか、スタッフが口頭で補足・説明をしたり、「笑顔展」と題した活動中の笑顔の写真の展示、活動内容にちなんだクイズ大会を実施したりした。また、東北部塩竈プロジェクトで作製した観光プラン作成ツール“WEBマップ”や興味喚起を誘う“PR動画”も同時にアピールする機会とすることで、弊団体の活動地域に興味を持ってもらったり、願わくば実際に足を運んでもらうことまでを意識しての活動となった。



左：説明員による語り



右：ワッフルサンデー

【活動内容】

今年度の青山祭へは、1年間の活動内容を展示する教室展示と、ワッフルサンデーを販売する模擬店の2本柱で参加した。

前者は、模造紙を用いて弊団体の紹介や年間を通して行われる活動を紹介するものであるが、それ以外にも日頃よりお世話になっている方々の笑顔の写真展示をしたり、インタビューの映像を流したりした。また、ただ展示するだけでなく、弊団体のスタッフが“説明員”として時間交代で配置につき、来場いただいた方の、展示内容に対する疑問点や興味を持った点などを積極的に聞き出していた。

後者は、昨年度までの流れを大きく変える試みとなった。というのは昨年度までの模擬店では、活動地域の名産品や特産品を用いた食べ物の販売を行ってきたが、本年度より“売り上げを寄付する”ことを目標に、商品の大幅な変更を行った。ワッフルサンデーを販売しつつも活動展示にも興味を持ってもらえるよう、店頭での積極的な呼び込みも行われた。

お陰様をもって、三日間で教室展示は、のべ300名を超える多くの方々に御来場いただき、模擬店も黒字達成をする運びとなった。青学生のみならず、教職員や他大学の学生や職員の方々なども見え、弊団体への関心が高いことが伺えた。また、後者の売り上げ利益は、慈善団体や復興NPOへの寄付を考えている。

青山祭(学園祭)

【スタッフの所感①】

私は今年の青祭を通して、ボラステ1年目ではあるがこのチームの温かさに触れることが出来た。

もちろん、商品を買って頂いたお客さんの「美味しい」という言葉も想像以上に嬉しかったのだが、周りのチームメイトの楽しそうな表情、作業を手伝ってくれる姿に私自身何度助けられたか分からない。

普段行っているボランティア活動とは趣を異にしているが、こんな所にも私はボラステの良さを感じることが出来た。



賑わう店頭の様子

【スタッフの所感②】

「お話できてよかったです。」と、言ってくださったのは、栃木から足を運んでくださった方。他大学で活動する方と話す初めての経験は自分の活動を考え直す貴重な機会となった。今年ボラステが掲げたテーマは「ボランティアの魅力を沢山のの人に知ってもらおう」だったが、それ以上に多くを教わった。ボラステのスタッフをはじめ、沢山の人の温かい協力があつたから、無事に終わられたのだと改めて思う。3日間を通して学んだことをこれからの活動に生かしたい。



非常に多くの方々からメッセージをいただきました

【来場者アンケートより】

活動展示で実施したアンケートでは、半数以上の来場者が面白かったと感じており、9割以上の方が弊団体の活動に興味を持ったと回答している。一方で、今回の教室展示以前より弊団体を知っていたという来場者は、半数に満たなかった。

来場者の気を留めた展示としては特に、東北・国際・地域の各部が作製した動画上映、各活動の“笑顔”にスポットライトを当てた写真展示が挙げられている。

また、スタッフの説明の丁寧さが来場者の足を止めるきっかけにもなっていた。

来場者の意見・感想では、カラムンガイのお茶やサゴチップスを食べてみたい、パンフレットが手にとりたいものばかりだった、清掃活動を見かけたことがあるといったボランティア・ステーションの活動に対するものや、写真が多くてよかった、クイズ大会が楽しかったといった教室展示に対するものが寄せられた。その他、青山学院に入学したらボランティア・ステーションに入りたい、今後の活動をポータルサイトでチェックしていきたい、ボランティアは継続することが力となる、震災への意識が薄れていたので考えさせられたといった意見が挙げられていた。

【今後の展望】

今年度の青山祭の反省を踏まえて、以下二点のことに留意して来年度の青山祭を迎えたい。

一つ目は、ハロウィンである。今年度はハロウィン(10月31日)と青山祭の時期がバッティングしていたため、ハロウィン後の渋谷区を清掃することができずに終わってしまった。毎年ニュースで特集されるほどの状態になる渋谷区の清掃を、来年度以降実施していく予定だ。

二つ目は、目的の明確化である。売り上げのうち黒字部分は寄付をするという意見で内部は合致していたが、ご来場いただいた方々には何も伝えられなかった。来年度以降は、どこへ寄付をするのかも明記して模擬店を実施したい。

非常にありがたいことに、活動地域の方や遠方からお越しいただいた方も多くいらした。そうした方々にとっても、「見ごたえがあつたよ」と、今よりも言っていたような活動を今後も続けていく次第だ。

卒業学年報告

私が当団体に入ったきっかけは、「現地のためになにかしてあげたい」という気持ちではなく、PR活動に興味があり、当団体の広報課で活動したいという気持ちからでした。そのため、当初は広報などの運営業務に価値を見出し、実際の現地の状況に対する理解は少なかったと思います。

しかし、現地で活動させて頂き、初めてボランティアの良さを知ることができたとともに、「現地のため」という言葉を軽々しく扱っていたことを痛感しました。それは、私が独りよがりな考え方で、達成感を味わいたかっただけで、「よかれ」と思って企画した活動が、現地の方が本当に求めているものなのかと考えることを忘れていたからです。私はこの教訓を得たことで、約3年間有意義な活動が続けることができたと思っています。そして、活動を支援してくださった多くの方々の支えがあったからこそ続けることができました。

私にとって当団体は、「ボランティア」を、そして「自分自身」に対し、より深く考える機会を与えてくれた場所です。

これからも、当団体が多くの地域に貢献し、「ボランティア」したいという人に限らず、あらゆる学生が成長し合える場であってほしいと願っています。

2014年度学生代表 経営学科4年 磯村 亮太郎

2011年3月11日、当時私は在学していた高校の卒業式の最中であり、今まで経験した事の無い衝撃を受け、震災の恐ろしさを実感した瞬間でした。

大学入学後、ボランティア・ステーションの門を叩き、多くの先輩の元で少しずつ物事の考え方、本質の捉え方を身につけました。ご縁があって宮城県塩竈市の復興支援活動に携わる中でリーダーという大きな立場を経験させて頂き、他者を巻き込む重要性を学びました。

塩竈市復興のため、一学生が主体性を持ちながら市長や市議会議員、経営者の方や他大学の教授など幅広い人脈を築き上げていながら活動の規模を拡大出来たことは、顧問の先生や大学職員の方々のサポート基盤が整うボランティア・ステーションの特徴だと思います。

また復興支援に携わる中で気づいた本当に恐ろしい事は、震災の事実が風化している事です。この風化を少しでも防ぐために、活動を通じて啓発していく事がボランティア・ステーションの意義であり、私達だからこそ出来る可能性であると思います。

私にとってボランティア・ステーションとは「自分の可能性を広げ、多くの人と共に未来を創造していく場」であり、学生生活の中で最も成長させてもらった環境でした。

2014年度 塩竈プロジェクトリーダー 総合文化政策学科4年 森田 剛

卒業学年報告

活動を通じて実感したのは「ひとを助ける」ことの難しさ。

陸前高田プロジェクトのリーダーを引き継ぎ、2014年度のボランティアを企画するにあたって、色々な活動に手を広げようと模索していた時がありました。しかし、「ここには確かに多くの解決すべき課題があるが、あなたはその問題に踏み込んで一体どうするのか？」と、現地で生活し、高田のメンバーを支えてくださっていた方に問われ、目がさめる思いがしました。

何かしたいという想いだけが先走り、私は己の行動によって生じる責任について考えていませんでした。当たり前のことですが、課題が見えていたとしても安易に踏み込んでいくことは相手をかえって傷つけることになるかもしれません。休みの期間だけボランティアが可能で、年に数回しか様子を見に行けず、卒業してしまえばその後の活動の責任は取ることができない、そんな自分の力不足を痛感する歯がゆい経験でした。

私は「ひとを助ける」ことはできなかったが、その代わり助けられ、与えられ、温かい言葉と笑顔に励まされ続けた3年間でした。今度は社会人として陸前高田の人びとの力となれるよう、そして、今日を生きたかったはずの、亡くなられた多くの方々のことを胸に、感謝を込めて、日々を生きたいと思います。

2014年度陸前高田プロジェクトリーダー 国際政治学科4年 米澤 理音

大学2年生の春にボランティア・ステーションに入るまで、私はボランティアとは無縁の生活を送っていました。それでも、「人を助けるのはお金ではなく人の手である」という思いを胸にこの団体に入りました。

私にとって、「一般学生を巻き込む活動の企画・運営」というのは正に未知の領域でしたが、現地の方や参加者のことを考えながら活動を進めていくことは大きな刺激でした。

「自分と他者相互の利益・学び」を考えることは自己理解・他者理解に繋がる大きな学びでした。

特にボランティア・ステーションの活動の場合、「他者」も現地の方と参加者とに分かれます。「現地の方にとって本当に助けとなる活動」と「参加して意義を感じ、学びを得る活動」とを両立させることは容易ではありませんでした。つつい自分本位の活動を考えてしまい、「この活動は誰のためのものなのか」という問いに躓くことも何度もありました。

その度に現地の方のことを思い出し、またお話を聞き、「何をすべきか」を考え直しました。頂いたいくつもの笑顔と握手、そして「また来てね」の声は、自分がやってきたことが間違っていなかったという確信と今後への道標となりました。

今後は大学院への進学が決まっておりますが、改めて「相互の利益・学び」を追求したボランティアの形について研究し、同じような活動をする人の役に立てればと思っています。

2014年度企画広報課リーダー 英米文学科4年 松川 達哉

卒業学年報告

“課題を見つける度に考え話し合い、周囲に働きかけ挑戦してみる”

このような貴重な機会を与えてくれたのがボランティア・ステーションでした。

大学2年生の春に地域部に所属してからこれまで、私自身にできる「何か」を必死に探し続けてきました。知的障がいをもつ方々と接すること、東北部の塩竈市における経済復興支援への参加、渋谷区における清掃活動、伊豆大島における災害復興支援などの企画など、最初は右も左も分からないまま必死でしたが、次第にスタッフ一丸となって、その地域の方々の力になれるよう願って活動を行ってきました。

想像していたよりも大学生の私にしかできないことは限られており、自らの無力さを感じ何度も悔やみました。成果が見えにくい活動の企画により、現地の方と活動に参加をしてくれた学生に不甲斐ない思いをさせてしまったこともあります。

大学4年生の今でも最終的に何を残せたかは答えが出ません。

ですが、現地の方々と青山学院大学の大学生を繋げるという目的の一つを果たせたことは間違いありません。

活動を共にした伊豆大島の方々からは、「大島に来てくれてありがとう。ボランティアじゃなくてもまた遊びにおいで！」と涙交じりの笑顔で伝えていただいたのをはっきりと覚えています。

自分の目で現状を知るということはもちろんのこと、関心を寄せ、大島に訪れることも現地の方々の活力となっていると感じました。

どの地域においても、ボランティア・ステーションのスタッフとしてその現状を発信すること、自分たち自身に何ができるのかを精いっぱい考えることが必要だと感じています。

最後に、活動において温かいご支援をしてくださった方々に、心から感謝しております。本当にありがとうございました。

ボランティア・ステーションに入って、多くの方々と出会って得られた考え方を、今後社会人として存分に活かしていきます。

また、後輩が引き継いでいくボランティア・ステーションを今後も温かく見守っていただけたら幸いです。

2014年度地域部リーダー 兼 伊豆大島プロジェクトリーダー 教育学科4年 久保田 千穂

卒業学年報告

私がボランティア・ステーションに携わるきっかけを与えてくれたのは、父でした。私の父は東日本大震災後すぐに被災地へ足を運びました。帰って来た父は達成感というよりも自分の無力さに落胆している様子でした。その後、同年に父は他界しました。大切な人を失った悲しみや辛さを経験した今だからこそ私にしかできないことがあるのではないかと、また父が被災地で成し遂げたかった事を引き継ぎたいという想いでボランティア・ステーションのスタッフとなりました。

1年目は気仙沼市で活動し、2年目は校内での気仙沼市PR活動をはじめ、塩竈市でのボランティア活動を行って参りました。青いTシャツ姿の私たちを見て声を掛けて下さる方、お昼休みに合わせて涼しい休憩場所を用意して下さいの方等、様々な形で“心の温もり”を感じることができました。ボランティアは形あるものではありません。だからボランティアの正解もないと思います。

しかし、心の中にある温もりを繋いでいくことだけは決して忘れてはならないと東北の方を通して感じる事ができました。ロボットの発展等、益々人力が必要とされなくなる時は近づいていますが、悲しい時や辛い時に心の拠り所となるのは人間です。

私は父から受け取った温もりをボランティア・ステーションで生かすことができ、感謝しております。これからのボランティア・ステーションも人が持つ心の温もりで繋がる仲間であってほしいと思っています。

東北部渉外課 フランス文学科4年 高野 加怜愛

私は大学に入ってボランティア・ステーションの説明会に参加し、「私でも何か東北のためにできるかもしれない」と思ったのがきっかけとなりました。初めはミーティングや活動についていくので精一杯でしたが、優しくフォローしてくれる先輩、何でも話せる同期、頼りなくても私に声をかけてくれる後輩、そして快く話し、サポートして下さる現地の方々、たくさんの人に支えられてきた4年間です。

活動の日々はあっという間でした。企画をするようになってからは壁にぶつかることが多くあり、その時には、「それは現地のためになるのか」という自分なりの軸を思い出し、今までこの団体を作り上げてきた先輩たちの想いも考えて活動してきました。そして、できないことの中でも、小さなことでも、自分になにができるかという想いを忘れないことで関わり続けたい気持ちが強くなりました。

私は皆で一つのことに同じ想いで向かうことのできる喜びを他のコミュニティに所属したことで気づきました。一つのことについて話し合い、自分の想いと相手の考えを合わせてより良いものを作っていくこと、時には意見をぶつけ合うこと、その時間が今はとても大切で、それを通してできた仲間も上下関係なくかけがえのない存在です。これからはその機会を一つ一つ大切に、今まで多くの人に与えてもらってきたものを忘れずに、社会に出て返していきたいです。

今まで本当にありがとうございました。

東北部渉外課 法学科4年 佐藤 亜海

卒業学年報告

「ボランティアに主体性を持って関わりたい。」

これは、紆余曲折を経て入学した私が漠然と考えていた弊団体への入部理由であり、かつ思考の軸として、又多くの葛藤を生んできたものです。そして現時点での私なりの結論は、この主体性とは活動を行うにあたり、現地・参加学生・弊団体に対する総合的な責任であるということです。

阪神大震災でボランティアという存在が認知され、東日本大震災以降、各地でボランティアの関連団体はブームのように設立され、刹那のうちに消え去りました。自己満足、或いは偽善だというボランティア観は、実際の現地への貢献や負担を顧ず、面倒な後処理等には気づけない人々の間違った正義“感”により、依然として世間に根強く残っています。殊、東北・塩竈市に限れば、一学生団体に過ぎない私達も最初の内はそう思われていたかもしれません。

しかし、私達は本気で現地の為になることをしたいという強い想いを基に、当初は東北の「復興」、2012年度以降は塩竈の「経済復興」という学生団体としては稀有な目標を掲げ活動しています。その時限りの学生でも出来る活動に終始するのではなく、地域社会の先を見越した、学生だからこそ挑戦できる困難な活動に対峙すること — 同時に、山積した問題の中に埋もれた一つひとつの声に対して向かい合い、青学生を巻き込んで現地に貢献できる活動を継続し時に予想を上回る成果を懸命に残してきた結果、信頼は生まれ深まり、次の活動へと段階は進む — こうした経験は団体の礎として後輩達へと引き継がれてきています。

復興とは表現の難しい、一概に表すことができない言葉です。そしてそれは、ひとつの区切りではなく継続性を孕んでいるものであり、その瞬間は目に出来るものではなく、ゆっくりと辺りを見回して気づくような、ジワジワとところに宿ってくるもの — いつの日か、「あの時ボラステの学生が活動していたなあ…」と、震災のことを抜きにして私達の活動を懐古できるようになったときこそ、まさに復興したといえる状態なのではないでしょうか。

さて。入部以降4年間、塩竈をはじめとする各所での活動の源にあったのは、活動に対する責任と感謝です。企画広報課の添削担当としても、個性豊かな後輩達の“味”を消さずに責任を持って意図するところを多くの外部に伝えることは予想以上に多忙かつ、やりがいのあるタスクでも在りました。昨年度卒業された小笹先輩より担当者として指名された時の緊張感は忘れ得ません。広報物とは即ち団体の顔であり、如実に活動に対する姿勢や品位を表すものです。とりわけ、文章に対して後輩達には辛辣な言動を採ることも多々ありましたが、SNSをはじめとした昨今の言動が与える影響は周知の通りです。

最後に。ボランティアはどこで繋がっているのか分からないタペストリーのような、人々の絆によって現代社会を補完出来る活動だと私は考えます。そして、今後も後輩達が活動を展開して参ります。

WEBマップ作製をはじめ、顔馴染みになるほどお世話になった塩竈の皆様、瀬川元代表をはじめとするボラステのスタッフの仲間、これまで活動に参加して下さった青学生、日頃よりお力添えいただきました大学関係者の皆様。お蔭様で活動をこれまで続けることが出来ました。本当にお世話になりました。

末筆ながら、4年間に亘り団体で活動させていただいたことに感謝申し上げます。
また今後とも、青山学院大学ボランティア・ステーションを宜しくお願い致します。

東北部企画広報課 史学科4年 岩村 洋介

ボランティア・ステーション学生スタッフ一覧 2015（第5期）

執行部	
代表（5代目）	駒木根 怜
東北部リーダー	松村悠太郎
地域部リーダー	春日井大貴
国際部リーダー	吉川祐太
広報課リーダー	田中守
渉外課リーダー	久保田明香
総務課リーダー	宮澤和浩
会計	弘光梨奈
	上等由貴子
	新井健斗

プロジェクトリーダー	
塩竈プロジェクト	今野友彰
陸前高田プロジェクト	田中守
フィリピンプロジェクト	新井健斗
インドネシアプロジェクト	吉田真弓
ネパールプロジェクト	吉川祐太

東北部
松村悠太郎
宮澤和浩
田邊菜実
星野桃子
弘光梨奈
工藤詩絵里
今野友彰
田中守
神原希
久保田明香
媚山泉
高野菜都美
庄野聖也
岡林真琴
安藤清香
吉澤萌枝子
大谷輝世
山崎航太郎
太田良英
磯村亮太郎
米澤理音
森田剛
佐藤亜海
北澤光
小野寺南美
松川達哉
岩村洋介
高野加怜愛
茂森真奈
杉山美里

地域部
春日井大貴
中島由加里
駒木根 怜
白根亮佑
丸山万里枝
池田もも
上等由貴子
大山明
飯田遙
姚菲琳
月岡郁
吉田恵美花
小島優希
久保田千穂
狩野詩織
山田和美

国際部
吉川祐太
三崎秋人
谷田部悠亜
小山佳奈実
清水瞳
吉田真弓
笹澤桃子
有馬菜穂子
川上渚紗
鈴木紫苑
及川麗実
渡邊裕憲
山田真優
高橋聖奈
山本優衣
Seongjun Lee
今井玲那
新井健斗
吉川祐太
青木咲
山崎真由
有田理瑳
高橋里緒
能登貴一
中村真梨
鎌田優
大森蘭
高力葵
西溜夏美
森本優里



編集後記

青山学院大学ボランティア・ステーションには2011年5月29日の設立当初よりミッションがあります。

『社会に奉仕したいという思いを持つ学生に対し、社会のニーズに合ったボランティア活動の機会を提供し、青学生が「地の塩、世の光」となり、助け合い生きる世界を目指します。』というものです。

2015年は年頭より青山学院大学の箱根駅伝初優勝という、本学にとって喜ばしい知らせから始まった1年でしたが、その後は暗いニュースが連日のように続いたように思います。

オーストラリアの大規模火災にはじまり、ネパール大地震、箱根山噴火、中東の熱波、大雨による鬼怒川氾濫、中東やパリで相次ぐテロ…、枚挙に暇がありません。

そして今日もなお、復興のためにご尽力されている方々や難民と呼ばれる状況下で助けを求めている方々が多くいるという現実を忘れずにいたいと日々感じております。

この年次報告書では弊団体の活動を記して参りましたが、記載されている当団体の活動とは別に、天災等の復旧活動や地域の支援ボランティア、地方創生に関わる学生団体、NPOあるいは企業に所属し、取り組んでいるスタッフも多くいます。

また、社会問題の解決を目指して勉強を積み重ねている学生、プロジェクトで海外にいったことがきっかけとなり留学する学生も多くいることを汲んだ上で、再度お読みいただけると幸いです。

「学生の私たちに何ができるのか？」

それぞれが悩み、もめ合うこともしばしばあります。
それでも、多くの先輩が試行錯誤の末に継続し、各地と渋谷を繋いできた襷は、半年後に6年目を迎えます。

活動は私たち学生だけで行うことが出来るものでは決してなく、皆様の多くの支えがあってこそ成り立つものだとして学生スタッフ全員が考えています。

今後も変わらずのご愛顧を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

2015年11月30日

青山学院大学ボランティア・ステーション

企画広報課リーダー 兼 陸前高田プロジェクトリーダー 田中 守

青山学院大学ボランティア・ステーション2015年次報告書

編集：広報課学生スタッフ

発行：青山学院大学ボランティア・ステーション

〒150-8366

東京都渋谷区渋谷4-4-25

政策・企画部 ボランティア担当

Tel.03-3409-9612 E-mail. agu-volunteer@aoyamagakuin.jp



@agu_vsta



<http://www.facebook.com/agu.vsta>



[instagram.com/aogakuvs](https://www.instagram.com/aogakuvs)



<http://ameblo.jp/agu-vsta>



agu.vsta.2015@gmail.com



<http://www.cc.aoyama.ac.jp/~agu-vs.110529/>

AGU-VSでは「青山学院使途指定型募金・ボランティア支援活動」を通じた寄付を募集しております。詳しくは以下の連絡先までお問い合わせください。

政策・企画部 ボランティア担当 Tel.03-3409-9612

E-mail. agu-volunteer@aoyamagakuin.jp